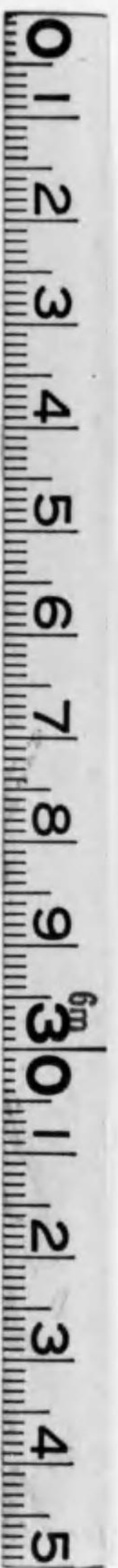


始



新小説

第五卷

味と趣味の益

集年

文庫

行發日 月 年一十三治明

第六卷九第

宵月夜

目要載所

たさめなト (不登)

吾戀人 (日田)

別れの歌 (河永)

木 (荷村)

寄田博書 (本木)

海生 (葉天)

緑陰文學談

集年

第三卷

第十號

回一月每 行發回十

有所種社 進三第

友習文

行發日五十月九年一十三治明

集年

第一集

次目

川魚日記 野鳥水

忘れぬ夜 野鳥水

光衣 野鳥水

楓の龍 野鳥水

和歌 野鳥水

俳句 野鳥水

新田の伝説 野鳥水

會館の伝説 野鳥水

生野の伝説 野鳥水

香野の伝説 野鳥水

新田の伝説 野鳥水

會館の伝説 野鳥水

生野の伝説 野鳥水

香野の伝説 野鳥水

新田の伝説 野鳥水

會館の伝説 野鳥水

生野の伝説 野鳥水

香野の伝説 野鳥水

刊初年新

新潮

いしは海人のしわざなりけり契沖

みせてかすもや天の香山 春満

を筑波も遠く足尾もかすなり

峯こし山こし春や来ぬらむ 貞湖

刊増時臨集年

第五卷

集年

刊發館文博京東

特 223
529

507



上海
林政
治





はしがき

一昨年還暦を迎へた私は、恰も數年以前よりさかんに興りつつある明治文學研究の聲にでも促がされてか、舊友數氏から文學少青年時代の舊作小説を取纏めて、還暦記念に出版してはと奨められたが、さて四十餘年を経過した今日の眼で讀み返してみると、宛然死兒にでも再會したやうな懐しさは痛感するけれども、その着想も筆致も全く冷汗ひやあせものなので、いかに童心に立ちかへつても上梓するの勇氣なく見合せてゐたが、この數年來續々多くの知友を喪ふに至り、俄然心機一轉して、舊作掲載の諸雑誌を物色蒐集し、二十餘篇を寫し取る事を得たの

で、その中より十二篇を選び、往時私が文筆に意を断つて、築き上げた商店の「創業四十年」記念日に際會したことに結びつけ、九月六日を發行日として、之が出版を敢てする事とした。

従つて私は此の小冊子を、明治文學上の謂はゆる文獻に資せむなどとは夢にも考へてゐない。ただ四十年以前の明治文壇に於ける登龍門に押寄せた雑兵中の一人が、當時書いた小説てふものは斯くの如きものであつたといふ形見を、一人ぐらゐは残して置くのもよからうと思ふたからである。ところで、詩や短歌などは、その詠草も書物にされ易いが、小説となると知名の作家以外の輩の舊作など、路傍の枯草同様、更らに顧みる人もなければ刊行する者もなからうから、ものずき

などの誹りをも厭はず、茲に上梓して、さきに之を奨められた舊友並びに少數の知人方に贈呈する次第である。

なほ此の書の刊行に際し、校訂装幀等、舊同人百子西川正治郎君の勞に俟つところ多かりしを附記して、感謝の意を表す。

昭和十四年初秋

天眠 小林 政治

難破船	一六四
落花流水	一七八
宵月夜	一八六

附 その頃を語る 二二三

- 一、「丁稚修業」の頃 二三五
- 二、「文學少年」の頃 二三八
- 三、その頃の私の作品 二四四
- 四、「よしあし草」と「關西文學」 二四七
- 五、出版會社「天佑社」の事ども 二五七

印 版 (口繪) 明治卅五年一月二日の關西文學同好會出席者記念攝影
 (挿繪) 著者の小照二面 天佑社の株券

四十とせ前

宮 島 曲

上

「これお松や、お竹や、三番さんにお手が鳴つてるぞへ、オヤ誰も居らぬそうな。お仙、お前一寸行つて御用を聞いてお出で。」

噎れたる亭主の聲歎むと同時に、トントンと階段を昇り来る登音。頓て靜かに襖紙を開きて、闕際に膝を突きたるは、此長門屋の臺所に采配を振る内儀なりけり。

「お客様、何の御用でムりますか。」

「あゝ甚う厄介になりましたが、廣島へ出立度いから、勘定をして下さい。」
「あの只今からでムりますか。」

「あゝ面倒ですが、どうか。」

「お客様、お氣の毒ですが、今日は月に一度の掃除日で汽船は休航ですから、明早朝の事に遊ばしては如何でムりませう。」

「イヤ今日中には是非廣島まで着かぬと都合が悪いのだから、面倒だが押切船を一艘仕立て貰ひ度い。」

「眞實にお惡運ですよ。いつもなら、押切船は澤山ムりますけれど、今日は貴客、宮田様の奥様の葬式に船といふ船は、残らず弔船に出ますので、と申しても他國のお方には分りますまいが、此殿島は御存知の神地でムりますから、人の死屍は昔から一つも埋めませぬので、皆向岸の、停車場から棧橋へお出でる道に御覽なすつたでせうが、あの墓地まで送りますので、棺輿に乗せた船の體を先に向けて、それへ曳綱を付けまして、丁度上方などで花や放鳥を贈るやうに、此島では親類や知己から贈ります。弔船が、何十でも何百でも其曳綱を曳いて参りますので、今日の葬式は此島隨一の金満家の事故、宮田様のお顔が廣いものですから、悉皆借切に

なつて、此殿島中一艘の押切船も残つて居ませぬ。誠にお笑止な事で。」

内儀は揉手し乍ら氣の毒けに言ふを聞いて、客は確と當惑の眉を顰め、

「それはどうも困つたね。實はどうでも今夜廣島で會はにやならぬ人が待つてるので……、こんな事なら昨宵此島へ渡るじやなかつたに、あゝ實に困つた。」

實にも迷惑らしく客は思案に首捻るを、内儀は術なげに暫くは客の顔を覗り居たりしが、

「ほんにそれはお困りなさいませう。どうか工夫が付かぬものか知ら。一寸お待ち下さいや。一度亭主に相談して試ませうから。」

「どうも御面倒ですね。」

「イエ滅相な。」と内儀は軽く打消して、階段の口まで出で行きて、

「モシ貴郎、一寸三番さんに御相談がありますから、上つて下さいな。」

「あゝ今行くよ。」

帳面つけ差の筆を耳に、帳場より上り來りし亭主は佛性らしき五十男なり。鳥渡客にお辭

義して口開かむとする機先を、お仙は制して、

「あのね貴郎、お客様が今夜廣島に是非御用がありなさるそう、今から出立度いと仰るのだけれど、今日は汽船は休航だし、押切船は皆弔船に出るし、ほんに仕方がないが、どうぞしてお渡し申せまいか。中國通は商船會社のも電信丸も今朝上つて終うたから、どうでも仕方があるまいかね。」

「そうだね、こいつは一つ困り物じやて。待てよ、ほんの宮島停車場までじやから、どないかして一艘出来まいか知ら。こう一つと。」

亭主は仔細らしく小首を傾けて、頻りに打案じ居たりしが、頓て闇黒に燐寸探り當てたる如く、勇ましく膝丁と拍ちて、

「オウあのぐづ平の事を忘れて居た。今日は彼の船なら屹度あるじやらう。何程儲けになるたつて、正可今日の弔船許りは平も出まいぜ。あの金狂人になつた當の敵だからな。ハ、ハ、ハ。」

「ホンニ、それはよい處へ氣が注きましたね。そりやなんぼあの平さんでも、生命のある限りは性根もあらうから、よもやあの事許りは忘れませう。昨日も弔船の事で誰かと押掄うた時、ブンブン怒つて歸つた位ですからね。それでも這度お養様が死れたと聞いた時には、顔色を變へて船を濱へ捨て置いた儘、吾家に歸つてから今にすつと鬱ぎ込んでるそうですよ。眞實にまあ可哀相にね。妾や平さんの事を思ふと、よく／＼不慙で堪りませんわ。」

「アハ、又お前のお得意が始つたな。ドリヤそんな事は聞いて居られぬ。私やこれから平藏の許へ行つて來やうから、例の愁歎話ならお客様に聞いて頂け。ナニ弔船にこそ出ないけれど儲かる事ならあの金狂人だもの。そりや譯はない。只つた今一緒に連れて來て見せる。」

出で行く亭主の跡見送り、客は一寸會釋して、

「色々と厄介を掛けて濟みませんな。併しお内儀さん、今御亭主が呼びに行つて下されたぐづ、何とか云ふ船頭は、狂人とか言ひなさつたが、危いやうな事はありますまいか。」

イエ中々そんな御心配は要りませんよ。お客様、あの平蔵と云ふ男はね、畢竟譯があつて少し慌けて居ますが、船漕ぐ腕に掛けては此島中に追付く者はありませんので、いつも引船が出ます時は、曳綱の一番を勤めます位ですもの。大丈夫でムります。」

「成程それなら心丈夫じゃが、併し何故に又それ程腕のある男が、人にぐづと言はれるのですか。」

合點の行かぬ儘、客は問ひ出せば、内儀はぐつと前に膝押進めて、

「それは御尤なお尋でムります。お客様その平蔵と申す男はね、誠に可哀相な身の上で、妾は彼の子供の時からよく可愛がつてやつて來ましたから、いつも人さんに笑はれる位、一入不懲に思ひますので、まあ貴客聞いてやつて下さい。こんな可哀そうな男でムります。」

溢れむ許りの熱心を面に現はして、内儀の譚り出でたるぐづ平の身の上咄は、實にも斯の如かりき。

中の一

父母の恵みも、深く受くるに違なく、ただ一人の母親を此島の假宿に失ひたる十五年前のお養は、氏素性も分らぬ巡禮姿の、まだ前髪さへ上げぬ十許りの小娘なりしが、西も東も知らぬ他國の空にて、而かも子供の身に母の死屍を抱えたる儘、途方に暮れてただ泣伏し居たりしを、世にも哀れに思ひて吾家に引取り、形許り乍ら葬式をも濟せやりたるは、平蔵の父親にて小佛と呼ぶる、平兵衛爺なりき。

それより七歳を過ぎて、平蔵廿の年を迎へける春の暮、散り行く櫻の花瓣と共に、五十年來振出薬一貼服まざりし平兵衛が、十日許りの煩ひにて敢なくも冥世に旅立ちしに、幼き頃母を失ひてより父親一人を頼りとし居たる平蔵は、身も世にあられぬ許り悲歎に沈みたりしが、世にも優しき義妹のお養に慰められて、日夜懇ろに回向を勤めつゝ、やうく七七日の中陰を濟せしが、此上は亡父の遺言に従ひ、一日も早くお養と祝言せんものと、悲しきが中にも平蔵は

ただそのみを楽しみて、涙に曇り勝の眼の、時々見換す許り冴ゆるは、實にこの事の胸に浮かびてなりし。

されど悲しき時には能く悲しき事の重なる物にて、一日平藏長門屋の客を廣島へ送り行きし留守の夜、此島始りてよりの大火なる稻荷焼は起りぬ。いかなる拍子なりしか稻荷社の燈明皿より事は起りて、僅か燈心二筋の火は二時間経たぬ間に、其近傍の廿五戸迄舐め盡せしが、あはれ平藏の宅も其災に罹れる一なりき。心許りの盃事とは云へど、人間一生に一度の大禮なればと、廣島の町々を涉りて買求めたる品々は、小さけれど銚子は錫、男蝶女蝶の折紙は、鬘斗買ふ時乾物屋にて錫と共に求めたり。盃も塗は怪しけれど朱の三つ組。羽織袴、襦袢に綿帽子などこそ船頭風情に要なけれ、小袖一枚宛帯一筋宛に財布の中大方空にして、心嬉しき儘いつもの腕一倍に漕ぎつけ、歸途を急ぐ中にも、明後日と云はず明日とも云はず、歸つた今日の晩にも盃事せむ物と、濱に船繋ぐまで嬉しき事の數々を思ひ續け居たりし平藏は、臍の緒切つてより死水飲む迄の住宅と定めし吾家の、たつた一夜の不在の間に灰燼となり居りし

を見たる時には、ただ餘りの意外さに呆れ返りて、暫時は狐にも憑かれたらむ如き有様なりき。

不意の火の手にお養は膽を潰して、女一人の如何にせんやうもなく、家財諸道具は皆灰にせしが、聊かの貯金さへ平藏が廣島へ持ち行き嬉しがる事に遣ひ果せし事とて、今は兩人も住むに家なく、建つるに金なく、残れる物とはこれ許りなる船の苦に、やうく夜露凌ぎつ。相談に相談を重ねたる末、平藏の否むをお養は無理に義理立て、さる人の肝煎にて紅葉谷の旅亭紅梅亭より家建つる金を借り受けて、お養は紅梅亭に酌婦奉公する事と爲りぬ。

中の二

「兄さん眞實に妾や辛うてく、しみく身に思ひ當りましたわ。こんな事なら兄様の仰つたやうに、あの儘此船中で暮したら宜しかつたに、ただもう他家は皆家建て、ムるのを、自宅丈け建てられぬのが悔しうて、思切つて奉公した物の、偕て住み込んで試ると、初めの思惑と

は違うて、皆つらい事だらけで……。」

紅梅亭へ行ってより三日目の夜、一寸隙を見て船へ歸りたるお養は、いかにも氣の沈みたる調子なり。

「ホンニ己が甲斐性が無いばかりに色々な苦勞をさせるなあ。定めて辛からうが辛抱して呉れ。一日も早く儲けて借金を濟ませうから。」

「イエ兄様そんな、氣苦勞はして下さすな。妾も今に少し慣れたら、またお座敷で貰ひもある事ゆゑ、都合がよくば來年一杯で歸れやうからね。併し家の方はモウ棟梁に頼みなさつたかへ。」

「ウム一昨日あれから直ぐにあの金を長門屋さんへ預けて置いて、歸途に棟梁に頼んで來たから、モウ明後日からでも普請に掛つて呉る筈じや。」

「嬉しい事。そんなら來月の十日頃にはモウ出來ませうね。妾も家が出来たら朋輩衆へもちと肩身が廣うなりますわ。ホ、ホ。」

「己は家の建つ日より、お前と一緒に暮せる方が餘程宜いと思ふわ。」

「でもそりや直きに歸れるやうになりますあね。それより御互に用心して此後煩はぬやうにませう。おや大分遅うなつた様ですね。」

「もう歸るのか。」

「また其中に参りますよ。」

「じゃ、そこ迄己が送つてやらう。」

歸り行くお養、送り行く平藏、月は兩人の影を長く沙上に寫しぬ。

中の三

其當座は三日にあけず、隙ある毎に船へ歸り居たるお養も、座敷の客に強いらるゝ盃を、顛え乍らにもやうく手に受けて、お世辭の一つも敲くやうになりてよりは、濱に向く足自づから遠ざかり初めぬ。

此程十日許りもお養は姿を見せぬに、若しや煩ひ居れるにあらぬかと、平藏は心に掛りて堪らず。或夜窓かに紅梅亭の裏口より訪づれしに、今はお座敷が外せぬ故、其中行くから歸つて下さるか、間が要つてもよければ待つて居て下されと、取次頼みたる下女よりの返事に、平藏心行かぬ乍らも暫し絶えたる逢瀬の戀しく、台所の上り框に腰掛けたる儘、只管待ち詫び居れる心も知らず、奥の座敷にてはサンザ浮かるゝドンチヤン騒ぎ。
半餉餘り過ぎて後ち、サラサラと衣の裾捌きも媚かじく來れるは、昨日に變りて顔に白粉さへ施したるお養なり。

「甚く待たせましたね。貴郎來て下さらいつでも、明日邊りには一度行かうと思つて居ましたのですよ。併し何ぞ御用ですかへ。」
思ひ做しか、詞付さへ稍々輕う聞えぬ、平藏は胸ただ怪しう擾ぎて少し口吃りつ。

「ナニ別段差當つて用はないけれども、大分久しう來て呉れぬので、若しや煩うてでも居やせぬかと思つて尋ねて來たのぢや。」

「ホ、それは大丈夫ですよ。此亭へ來てからはお蔭様でまだ風邪一つ感かす、この通りピンシヤンしてますから。」

「それにあの……。」

お養の口を閉ぢてより稍々話の途切れて跋の悪さに、平藏はかく繼ぎ差して暫らく考へたる後ち、俄に何事かを思ひ浮べし容子にて、

「……家の方も愈々十二日には疊を敷けるやうになつたから一遍歸つて見て貰ひ度し。それに一寸相談もあるのぢやから。」

「その事なら過般源さんからの傳言で承知してますよ。此節は忙がしいからキチンと今から決めて置く譯には行きませんが、吃度近い中に歸りますから……。」

折ふし奥の間より頻りに呼ぶ聲するに、お養は一寸舌打をして中腰に立ちつ。

「アイ今行きますよ……。だからね、その時又裕り話ませう。あれあんなに呼んでますから兄様御免下さいよ。」

輕き會釋を残して奥へ行くお養の後姿の、襖紙の陰に入るまで瞬きもせて見詰め居たる平藏の眼には あはれ数滴の涙を宿りたる。

中の四

「オヤまだ疊が出来てませんか？」

今日かくと二三日以来心待ちに居れる平藏の、新建の宅へ歸りたるお養は、上り櫃に片足掛けたる時、先づかく言ひ出でぬ。

「あゝ歸つて呉れたか、なにそりや琉球表の疊じやよ。備後表のは綺麗だけど、價が高うて弱うて損じやからこれにしたのじや。」

平藏は久し振に得ならぬ笑を片頬に湛へて、答ふる聲も別人の如く冴えたり。

「あらそう、妻やまた英座かと思つてよ。」

お養は家の裡を隈なう見廻し乍ら、やうく片隅に坐りつ。兩人の間に暫らく詞は途絶えし

が、聽て平藏はつくづく思案に沈みたる末、

「お養、こんな事を云ふたら怪しな事を言ふと思ふかも知らぬが、私や此家へ入つてから、しみく愁しうて堪らぬので、色々考へたが、お前どうかして戻ては呉れまいか。」

お養は其清き眼を少し異様に光らせて、

「そりや貴郎、借つたお金さへ拵えて下さりや、何時でも戻つて來ませあね。」

「一時に五十兩と纏つた金は到底己の手に出来はせぬが、實は過般長門屋の内儀さんにお前の事や私の事を色々咄したら、餘計な事は迎も出来ぬけれど廿兩位の事なら何とか心配してやらうと言ふて下さつたが、せめて半金丈けでも拵えて後は證文にでも取つて貰うて、お前を戻す譯には行まいか。」

「何ですつて、貴郎廿五圓ぐらゐのお金でそんな事が出来ますものか。それにあれから種々衣裳を調へたので又大分借金が殖えてますから、迎も今ではよし五十圓お金が出来ても、歸れますまいと思ひますわ。」

沖の鳥居を潜つた浪が、又も廊下へよせて来る)

寂びた調子の宮島曲の一節、色黒の三十男の厚き唇より出でて船は見送の宿の者等を跡に、早や三反許り沖へ漕ぎ出でぬ。

骨格逞しきに頬骨高く尖りて、深う窪みたる眼は怪しきまで曇りを帯びたるに、毛虫くつつけし如き兩眉の間には一種言はふやうなき陰鬱の色を現はしたるぐづ平の憔悴顔を見るにつけ、實に内儀の語りたる彼が境遇の哀れさの、覺えず胸に浮かび出でて、客はそゞろに涙ぐみし折ふし、船は早頭の端を廻りしに、忽ち行手の方に目を遮りしは、此船の主が昔の情人なりける宮田の妻が、葬式の海行列……美しき棺輿を乗せたる船は、實にも艫を逆に、曳網を曳き行く弔船の數。百、二百。

「畜生ッ、誰が手前等の尻に跟て行くものかッ」

不意に叫びたるぐづ平は、誠や宮島隨一の腕に燃かけて、漕いでく漕ぎつくる程に、見る見る追越しく、恰も矢を射る如く船は駛りぬ。

宮島停車場の棧橋漸く近づきて、一番を漕げる弔船を跡に抜越したる時、ぐづ平は初めて後より返りしが、悵然として暫く見詰め居たりし兩の眼より、數滴の熱涙ハラ／＼と溢れて其顫聲に傳ひし一刹那、船足のいつしか止り居れるに心注きて、また忽ち漕ぎ始めしが、這度は以前より更らに聲張り上げ、諺ふ宮島曲の調子はいよ／＼寂びれ／＼て、あはれ後方の弔船より起る弔樂の、猶それよりも悲しげに、轉た聞く客の腸深く泌み渡りぬ。

(浪のまに／＼より来る卒塔婆、磯にかゝりて叶うたねがひ)

あやかり度いとお百度踏むになぜにかなはぬわがねがひ)

明治三十三年九月廿五日發行「新小説」第五號第十二卷所載、懸賞小説 第一位當選、二九五點、(次點二九〇點)、ペンネーム天眠

二枚笈招

上

花は盛り、紀三井寺には開帳のあるといふ四月の中頃。兼てよりお國自慢の友が案内にて、和歌の浦には名所が御座るのーに権現から、四の鹽竈明神まで、ぐるりと参拜し終りて、折から目前の和歌の浦邊に潮満ち來れど、田鶴の昔の佛ただ徒らに移りにける芦邊茶屋の、茅葺ならぬ三層樓上に晝餐を濟ませて、心は長閑に腹加減は好し、ついウトウトと睡むき處を、直ぐ向ふの翠綠滴らむす名草の山腹に、家根丈け見ゆる紀三井寺の、いかにも晝に描いたやうな眺望に、早やそれへ心が移りて、さまでは急がぬ友に、ソレ帽子よソレ洋杖よ。

寄せては返す和歌の浦浪を右にして、ただ一直線に山麓まで續きたらむやう見ゆる堤を、春

の日の心靜かに、いつしか半ばを辿りて、深く左手へ切れて窪みたる入江の口に、架けたる橋の三つに斷れていと長々しきを、右に左に夥しう立てる海苔柴の、さし來る浪のまに／＼揺ぐ有様のいと興あるに、いつしか渡り盡せる折しも、何やらむ、ガヤガヤ罵り騒ぐ聲するに、何事ぞと近寄り見れば、橋詰の板小家の前にて、三十許りの寔れ果てたる男巡禮が、小腰を屈めて詫び居れるなりき。

「どうぞ御免なされて、何分うつかりとツイ橋錢の要りますのを存じませず、渡つて参りましたやうなことですから、どうぞ御免下さいますやうに。」

と頻りに詫入るを、よくも聽かでふたりの番人は、

「イヤ爲らんく、誰でも彼でも此橋を渡つたからには、一錢づゝ取らにや私等の役目が立たぬ、サア愚圖く言はずに橋錢を置いて行け。」

素氣なう言ひ放ち居れる詞の冷やかさは、折ふし咲き匂へる堤の櫻花を、ヒラヒラと吹き散らす情なき風の、それにも似たり。

佛に奉る詠歌とはいへ、聲張り上げて門口に立ちては、聊かの恵みを得て漸く通路する身の、僅か一錢の爲めいか許り心を苦しめけむ。あはれ三度四度頭を地に情を乞ひたる甲斐もなう、ただ口汚き罵詈の酬を得て、また悄然と一里の廻り道をなさむが爲め、再び橋を渡り歸らむとする巡禮の、いかにも見すばらしき姿の哀れさに、先の程より何となう惻隱の情に胸充されるたる余は、此時堪らず番人に橋錢を興へて、彼が數刻の徒勞を購ひ遣りつ。

幾度か低頭平身して、窪みたる眼に涙を湛へたる巡禮の感謝を後に、足早く行過ぎむとせし途端、端なくわが目に着きたるは、灰色に汚れたる彼が脊の笈摺なりき、墨色は浸潤みたれど「同行二人」とし鮮やかに記されたる。

巡禮の同行何人と記すには、必ず弘法大師一人を加ふる慣例なりとは、後ちに聞き知りたることなれど、それを知らざりし當時の余には、この一人旅の巡禮の笈摺に同行二人と記しあるを見て、一方ならず不訝しう思はれしものから、友と窃かに互の想像を語合ひつゝ、歩行を續け居たりしが、その疑問の解き難きに苦しみて友は叫びぬ。

「どうも合點が行かない、ひとつあの巡禮に聞いて試やう。」

路傍の芝生の上に蹲踞りて待間程なう、世にも頼み薄けに巡禮はトボトボと歩み來りしが、吾等の前にて一寸立ち停り、懇ろにお辭儀して行過ぐるを、つゝと追ひつきて這度は共に歩みつゝ、余は先づ口を切りぬ。

「通路さん、お前は二人連じやね。」

聞くより巡禮は如何にしけむ、怪乎として立ち停りしが、宛然あらぬ人を求むるが如く、遽かに己が後方を見廻し始めぬ。吾が問の突然なるに驚かされてにや。あらず。其寔れし面には、驚愕といはむよりも、それにも増して、いひしれぬ強き不安の色が漲れるなりけり。

「どうしたんだねお前は。連の事を今迄忘れて居たのかへ。不實ぢやね。」

その訝しき舉動に、友も呆れて斯くは問ひつ。
されど巡禮はさながら神經に異状を生じたらむが如く、今までとは打て變りて、果ては顔の色はいよ／＼蒼ざめゆくに、吾等の不審の雲はいや深うなりぬ。

互ひに無言の裡に數秒を過ぎせしが、聽て彼は突然に、

「今日は十五日でしたかね。」

と問ひ掛くる聲の、甚しく調律を失ひ居れるに、余も寧ろ薄氣味悪く感ぜしが、さりとして打捨てるも行かれねば、

「イヤ十四日だよ。」

と簡單に答へしに、

「オウ今日は確かに十四日！ そうだく。十五日は明日でしたね……」

と言ひ差して吻と太息を吐き、

「あゝ吃驚した。」

實にも彼は非常に驚きたる様なり。さあれ彼よりも吾等兩人こそ、餘りの彼が舉動の仰々しさに、却て打驚かされしなれ。

「全體お前はどうしたんだへ。今日が十四日だつて、十五日だつて、日の一日位が違つた處

で、何もそんなに吃驚するにや當らんじやないか。して連れはお前の妻君さんかへ。」

彼が何處となう茫乎として、氣拔のしたらむ如き容子に、友は白痴にもやと推しけむ、重ねて斯く問ひ試みしに、

「エツ、貴君方に何故それが分ります？」

巡禮は目を圓うして問ひ返すを、友は日頃より磊落なる男の事とて、忽ち眞面目を糺ひつ。

「ソリヤ僕等には眼があるから分るよ。現に最前橋の向ふで、お前と對の打扮の、廿四五の意氣な新造さんが、お前の後ろから跟いて歩いて居たのを、チャンと見て置いたよ、ねえ、君も見ただらう。」

根もなき事を罪深き業とは思へど、今更ら友の詞を打消しもならで、詮方なく打領けば、巡禮は世にも悲しけなる面地にて、少時は呆れたるが如く吾等の顔を見睨り居たりしが、聽て力なく頭を俯垂るゝと共に、

「嗟乎。」

と低き溜息を洩らしぬ。宛然胸の底深く押出したらんやうに。

余は何故とは知らず、ただ忍ぶべくもあらぬ哀れを催ふせしかば、窃かに歩行を促さむと友の袖を曳きぬ。紀三井寺への一路、開帳詣の善男善女は三々五々擦れ違ひさま、余等三人を不訝しげに眺めて過ぐるを、友も流石に心注ぎけむ。只管物思に沈める巡禮をそのまゝ後にして行かむとせし瞬間。

「モシ貴君方一寸お待ちなされて……。どうぞ後生でムりますから。ハイいつもあれを見られたお方には、佛への罪滅しの爲め私の懺悔を聞いて頂くので……。これはお大師様へ誓うてムりますので。」

周章て、ひき留むる巡禮の詞の奇さに、兩人は意はず、歩をとむれば、

「あゝ實に情けないお話でムります。全體これまでは彼女が命日の十五日丈けより姿を見せなんなのですが、私の信仰が足らぬため、今日も、さう迷うて出るやうになつたものと見え、何を御隠し申しませう、貴君方が御覽なされた女といふのは、私が以前深う言ひ交した女

の亡靈でムります。」

人通りの零時杜絶えたる折ふし、白晝とはいへ、物の化に魅かれたらむが如きその詞の薄氣味悪からぬにあらねど、思ひ迫れる彼の態度に動かされて、友も余も堅唾を呑むで耳傾けつ。涙片手に巡禮の譚りたる彼が身の上話は、斯くの如かりき。

中の一

「モシ貴郎、お風を召すと不可ませんよ。」

酔ひ倒れたる男の上へ、郡内紬の搔卷ふわりと着せ掛けしは、此長春亭の花と謡はるゝ養女のお勝にて、今年廿歳と言へば花は盛りの娘盛りなるを、可惜小町娘の情なしよと、ところの若者輩を、いかに惱ますやは、實に溢れむ許りの、その愛嬌麗にても知らるゝぞかし。

「ワム有難う。あゝ甚う酔されたので胸が切なうて。姐さんどうか濟みませんが冷水を一杯下さいな。」

「アイ直ぐに。」

と立つて行く女の後姿を、臙ろに霞める眼もて、つくづく見送りつゝ、半ば身を擽けたる色白の華車男は、仲町の岡田屋が酒店を主宰る清七とて、十五の春より今年廿四に至るまで、律義一片に勤め上げたる手代なるが、今宵しも酒屋仲間の集會に列りしに、日頃より仲間請のよき男とて、四方八方より雨の如く盃を向けられたるに、營業柄に似合ぬ下戸の、いつしか盛潰されて、前後も知らず此茶の間に倒れ伏せしなりき。

程なうサラサラと衣の音を先に立て、入り來りたるお勝は、今しも蹙音を聞くと同時に、遽に横はりて搔卷すばりと引被りたる男の枕元に坐りて、

「モシ貴郎、モシ清さんえお冷水ですよ。」

寝た振せる男の肩へ手を掛けて、その美しき黒眸勝の眼に滴らむ許りの愛嬌を湛へて、男の寝顔を覗き込み乍ら揺り起すに、

「ア、有難うよ。」

故と眼を擦りつゝ起上りたる清七は、娘と顔見合すより稍々驚きたる態にて、

「オやお勝さんでしたか、これはどうも失禮を申しました。」

と鳥渡會釋して盆の洋盃を取り上げ、たゞ一息に呑み干して、

「有難う御座いました。あなたがこゝへ來て居なると聞いては居ましたが、ついよう尋ねませず、最前座敷でも仲間の衆の手前を兼ねて心にもない失禮を仕ました。時にモウ何時でせう。まだ座敷では御酒が濟んで居らぬでせうね。」

お勝は意はず頬笑みて、

「オホ、まだやうく十一時過で、御連中はツイ今のお先にお歸りなされた處ですよ。アラ貴郎、そんなにお急ぎなさらずに、まあ御裕りなさいませな、ちよいと色々お咄もあるんですから。ねえ清さん。」

「イエまた今度參つて聞きませう。皆様がお歸りなされたとはちつとも私や知りませなんだ。こんな事を仕て居ては第一主人へ濟みませんから。」

矢庭に搔卷勿ね除けて立ち上り、清七は周章だしう身繕ひせむとせしが、常になく強ひられて過ごしたる酒の、日頃飲み慣れぬ悲しさには、足許危く、意はずヨロヨロと踰踏きて、倒れ掛らむとするをお勝は肩に扶けて、

「まあ貴郎、これではお危うムいますから、暫らく酔の醒めるまでこゝにお寝みなさいませ。それに最前御連中のお歸りなされる時にも、清さんは一同で酔はせたのだから、妾にね、ホ、ホ戯談でせうけど、よく介抱して上げて呉れと仰つて、あの堅作の事ゆゑ構はぬけれど、歸途に念の爲め岡田屋さんへ寄つて斷つて置くと仰やいましたから、貴郎マア御裕りなさいませ。併しあちらでは小母さんも相變らずお達者でせうね、此家へ来てからはツイ御不沙汰勝で……」

言ひつゝお勝はまた男を横にさせて、搔卷着せ掛けつ。

「イヤどうしまして。母も始終あなたの深切を悦んで居ます。併し甚うお世話に爲りますね。」

清七は據なく横はりて、お勝の手より船底枕取りたるものゝ、胸はいと怪しう立ち擾ぎ始めぬ、折から表の間の時計は、彈機の弛みてにや、いと長々しう十二時を報じぬ。
あくる日の東雲なほ薄明き頃、長春亭の脊戸の切戸口より、朧ろに立て罩めたる朝霧に身を蔽はれて出で行きしは、まさしくも清七の姿なりき。

中の二

「清七や、其方を今日呼び寄せたのは外でもないが、一寸其方に尋ね度い事があるので、まあそう遠慮せず、すつと此方へ寄んな。これ清七、遠慮と云ふ物はな、随分他處で仕ませうぞ。」

旦那のお召と開ける時より、若しやそれかと心に危ぶみつゝ、恐るゝ罷り出で畏り居たる清七の胸には、あはれギクリ五寸釘打たると思ひ。

「ハ、清七、別段そう難かしい顔をせずとも良いは。私も五十面下けてこんな野暮は言う

てるものゝ、一生に二度とない其方位の若い頃には、これでも意氣だとか粹だとか云ふ事は、随分よく噛み分けて來たのじゃやテ。なればこそ此春の仲間の集會の晩から、壞れ初めた其方が不行跡を段々報せて呉れる人はあつたけれど、子供の時分から馬鹿でない其方の事ゆゑ、モウ其中に眼が覺めるだらうと思ふたから、ただ日々出入勘定を嚴重にするやうにした丈で、まだ叱言の一つも言はなんだのじゃ。だが、清七、物には加減と言ふ物があるぞ、此頃の其方が舉動を、自分でよく考へて見なさい。何と思ひなされる。それでも正氣の沙汰と思はれるか。イヤサ一家の主人でもあらう事か、ツイ前頃まで鼻汁垂れて居た丁稚上りの分際で、二晩も三晩も續けて店を明るとは、餘りな放蕩ではあるまいか。」

日頃より人並優れて情深き丈け、一入主人の詞の二々が腸に泌み渡りて、清七は返さむ詞もなくただ疊にひれ伏すを、主人はジロリと流目にみて、

「其方とても廿四と言はゞ程なう宅を持たねばならぬ。其大切の別家前になつてから、何とした無分別な事じや。些つとは村で待つてる母親の氣にも爲つて見るがよい。いつもく來る

度毎に、其方が張る暖簾を一目でも見たらモウ死んでも満足じやと、涙滾して悦んで待つてゐなされるのは、幼少い時分から人一倍親思ひの其方だから、よもや知らぬ事はあるまいに。詰らぬ賣女風情の爲めに眼を眩まされて、生れ落ちるときから世話に爲つた母親や、此私を袖にする氣か。」

「イエ減相な。」

と清七は顔色變へて言はんとせしが、忽ちいまのわが身の行ひに思ひ及べば、實に斯くまで言はるゝとも、一口だに言ひ開かん詞なきに、いよゝ悔悟の念に堪へ難く、ただ双の眼に涙を泛べて疊に頭を擦り付けたる儘、暫らくは身動きもせざるに、主人も稍々詞を和けて、

「よもやそりまでは心も腐つて居まい、清七、其方も今迄の事が悪かつたと眼が覺めたなら、すつぱりと彼女の事は思切て終つて、此後二度と長春亭の関は跨がぬと私に約束を立てなさい。さすれば今日迄の事は何も彼も免してやるから。」

清七は先程より俯向きたるまゝ、物言はで、ただ溢れ落つる涙を袖に拭ふのみなるに、主人は

少し焦燥ちて、

「それともまだ性根か直らぬのか。イヤサあの長春亭の狸婆に誑らかされて、喰物の養女の爲めに、其方許りでなく母親の血までも絞らさせる積りか。」

「……。」

「但しは又、十年が間我子のやうに思うて育て、やつたこの私が心を仇にして、どうでも暇取らせる積りか。」

「……。」

「あゝ人間の心も、變ればマアこうまで變るものか。」

意はず嗟歎する主人の聲に、清七は二三度ブルブルと總身を顫はせた後ち、深き決心の色を眉宇の間に泛べて、勃然と顔ふり上げつ。

「ハイ重々私が悪るうムりました。けれ共もうすつかり心の迷が覺めましたから、綺麗に思ひ切りました。此後二度と御心配は掛けませぬ程に、どうぞ御安心下さいますやう。」

中の三

初めとは打て變りたる主人の笑顔に送られて、酒店へ歸りたる清七は、「お歸り」と兩人の小僧が店頭にて會釋するを、夢の如く聞き流しつゝ次の間へ通りて、金庫の前の結界の中に身を屈めて、帳面擴けしまゝ机に頬杖突きつ。次より次へと心憂き物思に沈み行く程に、幾度か小僧の酒賣りて釣銭乞ふを、其都度夢の覺めたらむ如く心注ぐかと思へば、また直ちに胸に描ける幻にひたりて、さながら氣拔のしたらむ如き有様に、兩人の小僧は、窃かに囁き合ひて眉打翠めぬ。

口汚く出て行け、暇呉れると叱り付けらるゝなればまだしも。親と主との恩と情を枷に、眞綿に首の強意見の皆一々が道理なれば、ヒシヒシと膽に堪へて、果ては退引ならず。綺麗に思ひ切りましたと口先で言ひしを誠と思はれてか。親の子に於けるよりも猶打悦ばれて、近い中に姪御のお春様に娶合せて分家させる下心とは、エイマア何たる勿體なきお詞ぞ。其場は義理

に詰りて詮方なくお請したりしもの、偕てツクヅク思ひ廻せばいかにしてもお勝を捨つるに
は忍びず。清七が狐に魅せられたらむが如く、茫乎と爲りて物思に沈めるは、まことや斷ち難
き煩惱の絆なりけり。

元來清七とお勝は、人こそ知らねまだ物心つき寂ぬる頃よりの馴染にて、田舎の隣同士の心
易さには、明けても暮れても互に往來して、ソレ雜様ごとよ、まゝ事よと、睦じう遊ぶ毎にも、
お前は脊の君、妾は妹子ぞと、心なきが中にも思ひ合ひて、それを互に稍々うら恥しう思ひ初
むるやうなりし頃より、清七は此岡田屋に丁稚奉公する身と爲りて、それよりは年に一度の盆
と正月毎に、在所へ歸りて、かたみに懐かしがる顔合すのみなりしが、次第に成人するに連
れそれさへ極りが悪るく。いつしか互に隔てを生ずるやうなりける程に、去年の暮よりお勝が
長春亭の娘に貰はれたる事は聞きたりしかど、流石に訪ね行かむにも營業柄に心臆して、時
折樽運ぶ小僧にそれとなく容子など聞く事はありても、所詮は路傍の花の、そぞろ忘れ終らむ
とせし時も時。此春の仲間の集會にて、端なくも兩人の赤繩は結ばれたるなりき。

岡田屋の白鼠よと世に言囃されし文け、日頃よく身持を慎みて、お主大事に、餘念なく勤め
居たりし清七も、あはれ初戀の昔を懐しみ、一度び意馬の狂ひ初めては、悍馬に鞭ちて峻坂を
駆け下る勢の、中々に止むるに由なく、主人には濟まぬ事とは知りつゝも、夜毎々々店を明
けて通ひ續くる程に、兩人の戀はいや深うなりぬ。

父親の酒の爲めに傾きそめたる家の支へにとて、お勝は殆んど身賣同様に長春亭へ貰はれ
たることなれば、名こそ養女とは言へ、其實は他の抱妓とひとしき憂き河竹の勤めの身なるも
のから、最早や清七が矢玉の略ぼ竭きたるを、養母に見すかさね、ともすれば、仇し嫖客を取
らせむ爲め兩人の交情を引裂かむとするを、お勝はこよなう苦にして、萬態の無理して首尾を
重ね居たりしことの、一方ならず養母の意を害ねしかば、今は表立ちて逢ふこともならざる
に、縁日詣などに托言け、三つ四つ裏町の岡田屋の酒藏に行きて、不寝番の源爺に頼み、清
七を密かに呼び出しては、儂なき逢瀬をやうく續け居たりしが、圖らずも此度、兵庫の干鯛
屋とやらに望まれて、既に跡からぬ支度金は養母の懐に入りしと聞き、お勝は清七を呼びよ

うて除けたらね。貴郎腹が立つじやありませんか、急に口を拭いたやうに猫を被つてね、丸で子供でも欺瞞すやうに賺すのですもの。妾やモウモウ厭に爲つて……。」

思ひ出しても口惜しそくに、又今更らの如く涙を催ほすに、清七は次第に頭を垂るゝのみにて、暫時は堅く唇を噛みメめ聞き居たりしが、聴て何思ひてや、俄に頭を擽けて其兩の眼を怪しう光らせつ、

「お勝、お前にも段々これまでは苦勞をさせて濟まなんだが、私やちやんと腹を括つたから、もう何事も前世からの約束事と諦めて、どうぞ兵庫の方へ行って末永う機嫌よく暮して呉れ。私やもう思切つたから。」

身は顫ひ居れど、無量の力ぞ籠りぬる聲音に言放てば、お勝は堪らず袖噛み締めて泣顔折れしが、聴て怨めし氣に男の顔を眺め上げて、

「清さん、そりや貴郎餘り胴慾ですよ、死ねとも言はるゝ事か、折れた箸でも投るやうにそう手輕う諦められる位なら、誰がこんなつらい苦勞を仕ませうぞ。それとも貴郎は妾に愛想

が盡きて見捨てる積りかへ。」

「何を馬鹿な詰らぬ事を、苟且にも私にそんな氣があつたなら、何故今夜來るものか。そんな無理を言はずに心を落着けて、御互の行末の事などよく考へて試て呉れ。お前も私も在所に一人宛年寄のある身じやもの。些とは親の事も思はにやならぬ。そりや御互にこうした交情に爲つたのだから、どうしてゞも添ひ遂げ度いのは腹一杯じやけれど、何分浮世の義理と言ふものは斯うした物じや。それにしても私に今少し甲斐性があつたなら、また何とか仕様もあらうけれど……。」

「清さん、貴郎はそんな體裁のよいお爲ごかしを言ひなさるけれど、妾やどうでも受取れませぬ。畢竟噂に聞いたお春さんとやらへの心中立に、貴郎はどうでも妾を見捨てる積りでせう。イエイエ何と言ひなさるもそれに違ひありません。エイツ口惜しい妾や捨られたのじや。モウモウ貴郎に見捨られたからには、妾や覺悟を決めました。清さん、随分健在でお暮し、妾やもう歸りますから。」

血相變へて立ち上らんとするお勝の袖を、ぐつと捉へて引止めし清七の右手は、力餘つてぶるぐくと打顛ひぬ。

「これ程までに事を分けて言うても、お前はまだ邪推するののか。エイモウ此上は是非がない。お勝！ サア一緒に死なう！！」

中の五

十萬億士の死出の旅路も必ず共にと、互に駈乎と身を括り合せて、酒藏の前の井筒に片足掛けしが、また今更らの如く萬感胸に迫り來て、此世の名残のいかにも盡き難く、幾度か身を躍らせむとしては互に躊躇ひつ。其際限なきに清七は心を勵まし、傍らの見上る許りの大酒桶の呑口目がけて、思ひ切つて横様に礎と蹴り付くれば、呑口飛んで十石餘の清酒忽ち滾々と迸り出づるに、其機を外さず足を逆に、兩人はあなや、底深く井の中へ躍入りぬ。

下

「其後はどうなつた事か些とも存じませぬ。やうく永い夢から覺めましたのは、それから百日も経つてからの事で、聞けば其時遽かの物音に驚いて、不寝番の源爺が本家へ駆け付けたので、時を移さず多勢の人が集つて兩人は井戸から引揚げられました。お勝は其儘到頭死ましたに引換へ、因業にも水の中で上に爲つて居た私は、復た蘇生して助かりましたが、餘程逆上たものと見えて中々正氣付かず。在所の宅へ送られてからも、毎日狂ひ亂れてはお勝お勝と口走つて居ました。丁度お勝の百ヶ日の夜、母が持佛の前で念佛申してゐる隙に、私は膳棚から出双庖丁を見付出して、此咽喉へ突き立てたのです。」

見ればいかにも巡禮の左の咽喉元には、軽からぬ疵痕あり。

「其痛手の爲め俄に夜が明けたやうに氣が注きましたのですが、私にはあの儘正氣付かずに死に度うムりました。」

死んだお勝には濟まず、岡田屋の御主人や世間の人達には顔が合されず。さればとて母には猶更ら面目なく、私はホトホト此世が厭になりまして、幾度か死掛けましても、前世からの私の罪業がまだ消えませぬか、其都度邪魔が入りて果されず、オメオメこんな浮世に生存へて死に勝る幾百倍の生耻を曝すとは、まあ何たる因果でムリませう。

まだく自分の罪が深いので、逆も死ねぬのであらうと諦めましたから、私はさる大師堂の堂守に爲りまして日夜死んだ勝への回向に勤めて居ました其年の暮に、重ねく不孝を掛けました母が、ついた思ひで死にましたので、一入此世が味氣なう思はれて、死んだ人達への追善供養。且つは吾身の罪業消滅を願ふが爲め、七度西國巡禮して後ち頭を剃る積りで、故郷の空を出立したのは丁度四年前でムリます。

それから色々の苦勞をして、やうくこれが七度目の順禮でムリますが、これから美濃の谷波さんまで参りましたら最終でムリますので、一日も早う濟ませて佛様へ仕へ度いと思ふて居ます。併し情けない事には、私の信仰がまだ至りませぬのか、この四年の間毎月命日の十五日

に爲りますと、お勝の亡靈が私に魅いて迷うて出ますので、それも私の眼には見えませぬけれど、命日に木賃宿などへ泊りますと、いつもお膳を二つ拵へて出しましてから、連れのお女中はどうなさいましたと、不訝相に四邊を見廻して、私は一人旅じやと言ひますと、それでも表からお入りなされる時に、腕かに廿四五のお女中が同じ巡禮姿で御一緒にお入りなさいましたと、必ず何處でも申します。けれども今迄は命日の十五日丈けに限つて居ましたのですが、まだく私の信仰が足らぬと見えまして、十四日の今日にも迷うて出るやうになつたのでムリませう。偕てく淺間しい情ないお咄でムリます。

なれど私は勝の事は一日も仇に思うては居ませぬので、畢竟私の身體はまだこんな塵の世に生存へて居ますけれど、精神はまさしく五年前に死んで、勝と一緒に浄土に居ますので、決して放れては居りませぬ。

これを御覽下さいませ。この笈摺は勝のに仕てムリます。私は此世ではこれを勝と思つて、一日も肌身を放しませぬのでムリます。」

巡禮は其懐より朱印の痕の満たされたる笈摺を取出して、吾等に示しぬ。

× × × × × × ×

先程よりの長々しき身の上咄に、友も余も甚く同情を催ほして、互に幾千の銀貨を紙に捻りて彼に與へつ。懇ろに其不幸を慰めやりて、彼が只管涙に咽びて感謝する間に、吾等は路を紀三井寺へと急ぎぬ。

村に入りて辻を左に曲らんとせし刹那、ふり返りて今來し方を眺むれば、さる百姓家の門に立ちて御詠歌をあぐる彼の巡禮の聲微かに、宛然冥世よりの音信を傳ふるが如く、寂びれ寂びれて悲しげに聞え來りぬ。

ふるさとや はるくこゝに 紀三井寺

花のみやこも ちかくなるらん

明治三十三年八月十日發行、雑誌「關西文學」第壹號所載、ペンネーム天眠

蛇 袴

あゝ厭だく。姉さんと別れるのは眞に厭だ。けれども仕方がないや。僕はいつでも此頃姉さんと別れねばならぬのださうだ。あゝ眞實に厭になつて仕舞ふな。

お父様はまたどうして、あんなに姉さんや僕等を窘めなさるんだらうか。今度出來た孩兒許りを可愛がつてサ。何だか薩張り譯が解らないや。それに又お母様も、今度のお父様がおいで爲すつてからは、些つとも僕等を庇へて下さらないで、又してもくお叱責なさる許りなんだから、僕はもうく悲しくて、寧ろ泣出し度くなるよ。何日だつけ、茶園に牡丹のお花が餘り美しくう咲いて居たから、つい何心なく一枝折つて、いつも姉さんが爲さるやうに、裏のお父様のお墓へ供へた時なども、あの蒼白いお顔を、毎晩お父様と御酒を召上つた時のやう眞赤になすつて、他處のお人やお父様の前では見た事もないほど怖い目附でお睨みなすつて、小供の

癖に、ま、ま、ま、と頭からお叱りつけなさる故、僕もつい口惜し紛れに思ひきり口答を仕て除け
 たら、到頭僕を眞暗なお土蔵の中へ投げ込んでお仕舞なすつた。僕は悲しいやら口惜しいやら、
 一生懸命に聲を張り上げて泣き立てたら、折よく來合せた門前の花屋の婆やが中へ這入つて、
 色々謝罪つて呉れたので、やう／＼の事出して貰つたが、餘り悲しかつたから本堂の裏手の
 椽の下で、地上に坐つた限り袂を噛み締めて泣いて居たら、復いつの間にやら婆やが僕の前に
 立つて居て、あら坊様、未だ泣いて居らつしやるの。男兒の癖に可笑しいじやありませんか、
 そんなにお泣きなされると女兒に化りますよ。サ、又お母様に見付つたら叱られまてう程にちや
 つとお泣き遊びませ。オ、お伶俐な事というて、洗ひ立の糊の強硬つた片袖で僕の目を拭いて
 呉れて、片手で脊を撫で乍らまた僕の顔を覗き込んで、まあ坊様、最前はどんな悪戯をなすつ
 てあんなにお叱られなさつたのと尋ねたから、僕は有の儘を獻款泣し乍ら答へたら、婆やは皺
 だらけの顔を擧げて、あの優さし相な凹んだ兩の眼の底に一杯涙を溜め乍ら、拭かうともしな
 いで、オヤマア眞にお可哀想に、奥様も亦餘りな爲され方、いくら今の旦那様への手前がある

とて、ようまあそんな酷たらしい事が出来たもの。ア、定めて前の旦那様も草葉の蔭で迷うて
 んらうと言うて、後は僕を強く抱き締めたなり泣いてゐた。其日の夕暮前に、姉さんが學校か
 らお退勤になつたから、僕はお母様が孩兒を連れて裏へおいでなされた後で、前に婆やへ言う
 た通り繰返して半分泣き乍ら咄したら、姉さんも堪らなかつたかして到頭俯向いてお仕舞にな
 り、半巾で眼を抑へ乍ら顫へ聲で、虎ちゃんほんに好い兒だから、もうそんな事を言うてお
 呉れでないよ。それに又そんな事を言うて若しかお母様に聞えでもすりや又々酷う叱られう程
 に。と仰つて、暫らくは頭の鬘をふるはせて御在なすつたが、お母様が這入つてゐる容子だ
 つたから、遽に坐り直して、何も知らぬ顔附で、縫さしのお仕事を膝へ上せなすつて、丁度い
 つか進藤の兄様が豪らいお聖僧様に連れてお貰ひなすつて京都へ學問しにお出立なさる前の日
 に、此寺へお暇乞に居らつしやつた時、あの鐘樓の横手のお池の端で、姉さんに何か仰しやつ
 た時のやうに、眼の椽を薄報うなされて、わざと疍張つたお聲で、虎ちゃん、篋を取つて來て
 頂戴と仰つた。

オ、その事で思ひ出したが、あの過般御本山からお越しなされた角見様とやら仰しやる執事さんは、出家の癖に頭も剃らないで、あのでつぷりと肥つた身體に、いつか京の呉服屋が持つて居た美しい桐の箱に入れてあつたのと同じ様な、綺麗に光澤のある着物をお召しなすつて、未だお若いのに黄金の入歯を光らしておるでなすつて、女子のやうにキラキラと光つた玉の這入つてる、宅の姉さんのよりは餘程綺麗な指輪を箆めて大層威張つたお方だつたが、一晩うちでお泊りになつて直ぐ其次の日に姫路の方へお出立なすつたが、何でもあの人はどんなに豪らいのか、宅のお父様も無暗に頭を低げて居らつしやつた。

僕が不思議で／＼堪らぬのは、あの執事さんがお出立なすつてから、宅の姉さんの御容子がすつかりと變つて仕舞つた事だ。どう考へて見ても解らない。何でも彼奴が姉さんを甚く窘めたに違ひないんだらうが、眞實に憎い奴だ、擲つても遣り度いや。それにあの、氣持の快い程さつぱりと仕てムつた姉さんが、それからと言ふものは、何だか心配相な、如何にも浮かないやうな顔附で、時々お仕事の手を休めてまでお考へ事許りなすつて、肩の動くほど大きな溜息

をお叩きなさる。其御容子がどうも怪しいので僕も心配で堪らず、何處かお悪るいんじやありませぬか。と密と様子を窺うて度々尋ねても見たが、いつも／＼決つたやうに、イヤどこも悪るうはないゆゑ、決して心配して下さるなと仰しやる限り、又直ぐに顔を襟へ埋めて太息をお叩きなさる許りなんで、僕はまう／＼氣が氣でなかつた。

すると昨晩の事だつた。僕が寢間へ這入つてから暫らくすると、奥で御父様と御母様と兩人掛りでたいへん姉さんを窘めなさる容子だつたが、到頭姉さんはシクシクとお泣き出しなすつたから、僕はムカムカと腹が立つて、一層のこと、奥へ飛込んで姉さんに加勢して上じやうかとも思つたが、あの怖いお母様のお目玉があり／＼と目前に見えるやうなので、其儘ちつと辛抱して目を閉ぢて居たら、餘程経つても歇まなかつたので、いつか知らぬ間に僕は寢て仕舞つたが、目が覺めた時にはもう夜が明けて朝になつて居た。

虎ちゃん、もう遅いから早くお起きよ。と平素のやうに起して下される姉さんのお聲が、氣の故か、どうやら勢が無さ相に聞えた。オ、姉さんお早う。と僕は飛び起るなり言うて、一

寸姉さんの顔を覗き込み、あの姉さんはまた昨晚お父様に叱られなすつたね、眞實に忌々しいお父様だ。と僕は力味返つて未だ後を言はうとしたら、姉さんは吃驚なすつたやうに手眞似で押し止めなすつて、イエイエそれは皆妾が悪るかつたのだから仕方がないが、お父様の事は必ず悪く申すのじやありませんよ。憎まれると皆お前の損だからね。と仰やつて、片手に握つてゐたはたきを持ち換へて、そつと襦袢の袖口で眼の縁をお撫でになり、あの虎ちやんや。姉さんはね、此頃にお前と別れなけりやならぬのだよ。と小さな聲で仰しやつた。僕は思はずぶるぶると身顫して、否、否。僕は死んでも姉さんと別れるのはいやよ。とかぶり、を振つて言うたら、姉さんはあの細い長い眉根を八の字形になすつて、そんな無理を言つたとして仕方がないよ。姉さんはどうでも近日に他處へ行かねばならぬのだから。併し妾が居らぬやうになつたら、必ず／＼氣を注げて、お父様やお母様の仰しやる事をよく聞いて、可愛がつていたただかなけりやなりませんよ。ときつぱり仰しやつたから、僕も一生懸命になつて、何故ッ何故姉さんは他處へおいでなさるの。と力を入れて尋ねたけれど姉さんはどう言ふ譯か、何も仰しやらずに俯向

いてお仕舞なすつた。ア、解つたく／＼あのいつか僕が進藤の兄様は一番好きだ、どうか眞實の兄様になつて下さらば好いにねと言ふた時に、傍に居た婆やが、ホ、そりや坊様何を仰しやります。今そんな事を仰しやらないでも進藤の若様は、追付け坊様の眞實の兄様にお爲りなさるのですよ。と笑ひ乍ら言うたら、姉さんはお顔を赧くなすつた事があつたが、あゝ解つた。それでは姉さんは、此頃にお歸りなさる兄様の處へお嫁に行きなさるの。と尋ねたら、アラマア此子は……と、姉さんはいつにない怖い眼附で一寸お睨みになつて、また直ぐに悄氣返りなすつたが、それでは何故僕を一人ぼつちにして、何處へおいでなさるのと無理に尋ねると、姉さんは過般お越しなされた執事様のお世話で、此地の學校の先生を廢めて京都の女學校へ勉強に行くの。と仰しやつたから、そんなら好いちやありませんか。丁度京都には進藤の兄様もお居でなさるし。と僕は不思議そうに尋ねたが、何も仰しやらないゆゑ何だか極りが悪く、けれどもあの角見様はほんにいやなお方だ。僕は虫が好かないのか眞から嫌で、見てさへ胸が悪くなつて。と舌打をして言うたら、姉さんは何を憶ひ出しなすつたのか、不意にホロホロと涙を

お滾しなすつて、虎ちやん！ とキツパリ仰しやつたから、ハイと言つて顔をふり向けたら、姉さんは……と言ひ淀みなすつて、寧ろ死んで仕舞ひたいよと仰しやつて、またお泣きなさるのだ。

ア、僕はもうく姉さんと別れるのは厭だ。けれども仕方がないや。姉さんは到頭今日から学校の先生をお断りなされた。僕はどうしても此頃に、姉さんとお別れしなけりやならぬのかわらぬ。ア、厭だ。ほんたうに厭になつて仕舞ふ。

評 首尾悉く一小童の獨語を以て成る。此の篇の如きものにては、云ふまでもなく主なる小童は却て客にして、客なる其語中の姉なるものは却て主なれば、作の工夫は小童の獨語中に「姉さんと別れるのは厭だ」といふ小童自身の胸懷を吐しむよりは、其語によつて憐むべき姉の容態を活現せしめむと力むるの點にあらざるべからず。而も又其姉の容態が小童の眼底に映じ來るの次第は、最も自然ならざるべからず。今作者が示せる用意と成功は果していかに。

(白蓮)

いつもながら優婉にして情致の饒かなるはこの作者の筆なり。小兒の口を藉りて姉のあはれなさま、側寫法によりて描き出されたる、君よくその長所を利用したりといふべし。

(鳥水)

明治三十年十二月五日發行、雜誌「文庫」第七卷第六號所載、ペンネーム証吉

お　く　霜

上

では何かい、お前はいつでも否だと言ふんだね。エ、お霜。と喫みさしの煙草敲き損ねて、疊の上に飛むだ吸殻を、周章だしう掴み上げさま灰吹へ移しつゝ、六十路に近き胡麻鹽頭が、少し詞尻に力を入れて言へば、其前に未だ生れて十月とは経たぬ幼児を膝の上に乗せて、悄然と坐り居る廿二三の瘠ぎすの女は、薄暗きカンテラの燈火に蒼白う照らされたる面を少し俯垂れて、昵と吾子の寝顔を見詰めたるまゝ、兩の眼許を濕ませつ。幾度か物言はむとして躊躇ひたる後ち、ハイ誠に氣儘を申して濟みませぬが、どうぞ此事許りは……と、やうく思切つて言出せしものゝ、何思ひ出してか遽に悲しうなりて、覺えず睫毛に傳はりたる涙の雫を、膝の

兒の顔の上にはふり落せば、不意に暖き夢の破れてけた、ましく泣出すに、搖ぶり揺ぶりて賺し宥むれど泣き歇まぬ口許へ、雪の肌を惜氣なう表はして乳房をあてがひ、またすやくと寝入る兒の可愛らしき顔を一心に見瞞りつゝ、意はず吻と吐息を洩せば、老爺も故とらしく歎息して、嗟乎これ程に事を分けて頼むでも、肝腎の御前が聽いて呉れねば仕方がない。イヤモウよろしい。お前には頼みますまい。此源兵衛が男一疋廢らすと思や、それで能いんだから。ア、是非がない。言うても無益だがこんな時に倅が居つたなら、また何とか工面もして呉れやうにと、力無さそうに言終りて悄氣返れば、女は顔ふり上げて、もうしお父様、辛い事仰しやつて下さいますな。成程段々お咄を承りますれば、御本家の御難儀もほんに御氣の毒で、身に叶ふ事なれば、何處までもお手傳ひするのが、人の皮被つた者の勤めではんすが、またどうぞ切ない妾が心の中も不慙と思召し下さいませ。一生杖とも柱とも手頼らねばならぬ良人には死別れ、未だ百ヶ日の忌中も勤め終せぬ其中に、況してあなたや此源次郎をふり捨て、何としてまあ浮河竹の勤めが出来ませう、妾や例へどうならうとも更らく此身は厭ひませぬ

ど、それでは死なれた佛に濟みませぬ。お父様、こんな氣儘を申ます妾は、定めて憎うもムんせうが、この子この源次郎に免じて堪忍して下さいませ。さる代り此身のあらむ限りは身を粉にしても働いて、御不自由勝ではムんせうが、朝夕の御心配文は掛けませぬ程に、どうぞ御辛抱なすつて下さいませ。と聲頭はせて言終りし物の、流石女心の悲しさいや勝りつ。吾子の上に蔽ひ掛りて泣沈めば、左程に倅や孫の事を思うて呉れる親切があるなら、些つとは此親の上も思うて呉れ。どうでもかうでも今度こそは、せめて五十か六十でも、少し纏つた金を此源兵衛が手に拵へにや、明日からは顔出しがならぬと言ふやうな、切端詰つた場合になつてるんだから、どうぞ聞分けて呉れ。それにまたお前が花街の勤めを左程厭がるんなら、せめては乳母奉公でも仕て呉れて、此年老つた親の顔を立てさせて呉れ。これお霜頼むく。何の源次郎の事ならば心配は要らぬ、おれも只つた一人より可愛い孫の事なれば、どこまでも氣を注げて、滅多に飢しい目にも會はさねば、風邪一つ引かす事ではない程に、其邊の處は安心して、どうぞ此源兵衛が一期の願を聴いて呉れ。これと言ふも皆年來御恩を受けた御本家への勤めた

から、あゝ義理と云ふ物は辛いものじや。と老爺は言終りて、又もや續けさまに吐息を洩らしぬ。

義理に迫られて詮方なく承知はしたものの、あのまあまざくしい嘘。エ、腹が立つ。御本家の御難澁などは根も葉もない眞赤な嘘とは、能つく分つて居れど、此世に此子ただ一人の外は、親同胞もない孤兒の悲しさには、強て否と言張る由もなく、乳母奉公の憂苦勞に悲しき月日を送らねばならぬ吾身は、罪業深き宿世の因縁事と諦めもすれ、何も知らぬ可愛い此子の、未だ乳離れもせぬものを、どうまあ慘うふり棄て、行かれうぞ。世上の母親は吾乳汁丈けで足らぬとて、牛乳や肉汁まで吞ませては、肥る吾子の顔を見て楽しむものを、妾許りはエ、何たる事ぞ。人並劣らぬ乳汁持つて居りながら、赤の他人の子に啣ませて、吾子が飢に泣く聲を他處に聞流さねばならぬとは、抑も何たる因果ぞ。かうした悲しい目に遭ふも畢竟吾身が不仕合故ではあれど、亦良人が天死故かと思へば、女心の愚痴かは知らねど、佛様こそ寧そお恨めし

や、ア一憶ひ出せば未だ年ゆかぬ振分髪の時分には、死れた良人を兄上と呼むで、楽しく此家に育ちしが、其頃には人並優れてお性質の好かりし養父が、いかなればあの様な、由ない賭事に浮身を襲す情ない方と化られしか。ほんに分らぬは水の流れと人の身とやら。此末ともにどんな憂目に逢はう事かと、思ひ廻せば寧ろ此世が果敢なく辛らく、一日も早う良人の後追うて行き度けれど、此子許りに心惹かされて、やうくこれまでは来たものゝ明日が日からは顔見る事も儘ならぬかと思へば、何を樂しみに生きてゆかうぞ。とお霜は更け行く夜半に睡みもせで思ひ悩めば、永き冬の夜もいつしか明けそめて、程遠からぬ太融寺の鐘、朝霧を破りて響き渡りぬ。

中

實にも辛らきは背丈伸びての奉公なりけり。よしや九尺二間の裏長家なりとも、吾家なりせば足腰延すにも氣は安けれど、主人への遠慮、朋輩への氣兼、偕ては丁稚下男に至るまでそれ

ぞれの心使ひ。吾も吾身の儘ならぬ不自由さも唯御奉公ぞと辛抱はして居るものゝ、大事の坊様を預る身には、噫一つにまで胸躍らす許り氣苦勞して、何事もお主大事と、影日向なく勤むる程に、良き乳母抱へしと御主人夫婦の賞めて下さるゝは有難けれど、それが爲め意地悪るき朋輩衆に羨まれ嫉まるゝ淺間しさ。二年が間の給金を前借して、残らず養父に渡した事も御存じ故、お慈悲深い御寮人さまに何彼につけ不慙がつていただき、襦袢の衿や端ぎれなど、度々下されば下さる程、一入妬まるゝ身は、お乳汁の能く出るやうにとて、朝夕に頂戴するお着を、傍から尻目に睨まれて氣兼勝に喉通すよりも心苦しく、家に残して来た源次郎が事は、抱いた坊様の笑顔をみるにつけ、むつがらるゝにつけ憶ひ出されて、祖父様があの通りなればさぞや邪慳にせられてゐることならむと案じらるゝほどに、會々朋輩衆の物言懸けるを聞き外せば、忽ち江戸の仇讎を永々しく尾に鱒つけ、やれ調子の高いお乳母よ、今の世に乳賣つて飯食ふは牛乳屋とお乳母許りよ。吾兒に吞ます乳汁賣らるゝ牝牛は不慙ながら、賣るお乳母こそ牛に劣りし畜生よ、と無殘の蔭口聞えよがしに喋り立てられ沸え立つ許りの胸を昵と押へて、口

惜涙を呑込む折しも、お霜どん、御寮人様がお召しなさいます、お樂みさま。とお霜の顔を覗き込むで、氣味悪る氣にニタリと笑ふは、常から取分け意地悪き小間使のお菊。

北野の鬼子母神様へ御寮人様のお供して参詣したる歸途に、有難き程に慈悲深き御寮人は、子を持つ親の心をお察下されて、堂島の木村様へお立寄の間、坊の守して夕刻まで遊びに行つて来よとお暇賜はりしかば、この二月の間、逢ひ度さ見度さに心も半ば狂はむ許り思ひつめたる源次郎の可愛き顔を胸に描きつゝ、いそぐと歩めば身はいつしか曾根崎の、吾家の前に立停つて居たりき。思慮も分別も先づ戸に手を掛けて引けども押せども明かぬ戸締りに、ふと顔ふり上げたる目の前へ、呼乎、斜めに貼り付けたる貸家札！

餘りの意外さに呆れ果てたるお霜は、さながら氣拔したらむ如く茫乎と突立ちたるまゝ、暫しの程は身動きもせず、門口に佇み居たりしが激しくうてる胸の動悸の、抱へし坊ちやまの身に傳はりてや、遽に目を覺まして泣き出し給ふに、やうく心注ぎて我に復りたる折しも、不意に後の方より、オヤお霜さん、と聞覚えのある女の聲するに、慌だしうふり返れば、東隣

に住むお信とて、時々心底からわれに同情して泣いて呉れた事のある同年輩の、巡査の細君なりき。

オヤ御機嫌様……と會釋したるものゝお霜は悲しみに胸先づ塞がりて、首俯垂れたるまゝ窈と袖口もて眼を押拭へば、ほんにまあお霜さんお察し申しますよ、とお信は氣の毒けに言ひかけつ。あなたは御存知でないでせうね、ほんにまあお氣の毒な。早うあなたに知らせてお上げし度いと思つて居ましたが、何分お居でなさる所が分りませんので……あなた源兵衛さんは到頭一昨日家主さんから殿しいお咄があつたので、源ちゃんを連れたまゝ、何處かへ行つてお仕舞なさいましたよ。オヤ妾とした事が、往來で立咄も出来ませぬ。サブまあく宅へお入り下さいなと先に立つて、兩の眼に涙を溜めつゝ、情氣返りたるお霜を、強ひて我家に誘ひ入れぬ。

下

二年が間此身から絞り出さねばならぬ血のやうなお金を先取りして、瞬く間にそを酒と賭博

になくせる事も、碌々世話せぬために源次郎が、あの可愛い丸々とした顔の蒼白う瘠せ衰へたる事も聞けば聞く程腹立たしく、悲しく、知らぬ他國の空に寒さと飢に聲涸らして泣きつづくらむ吾子の不憫さ。思へば思ふ程身も世もあらぬ心地はすれど、今更らいかにとも詮術なきに、況して今は、籠の鳥同然の雁はれの身の上なれば、只だもう神佛にお縋りして成行に任かすの外はあらじと、お霜はやうやう涙ををさめて、様々に慰め呉るゝお信の厚き情けを深く謝しつつ、先程よりすやくと寝入り給ひし坊様を、密と抱き直して門外へ出づれば、早やいつの間によら日は暮れ初めて、豆腐屋の鈴の音、いとど忙しう聞え來ぬ。

待つて居て下されし御寮人のお供して、木村様より家路に歸る途すがら、常の愛嬌よさに似もやらで打沈めるお霜の顔附に、どうしたんだへ、といつに變らず優さしう御寮人に尋ねられて、ハイ少々頭痛が……と何氣なう答へたるものゝ、お霜の面はあはれ目にたちて、いたく蒼さめて居たりき。

明治三十一年七月十日發行、雑誌「少年文集」第四卷第八號所載、「地賞」ペンネーム天眠

あだまくら

一

「飛べど翔れど追詰められて、無理に抱かれてハテ恐ろしや、今宵一夜はぬくめ鳥」。田の草取に稽古したる喉自慢に、濁みたる聲張上げて一節面白く謡ひ終れば、ヤンヤの喝采に一群邊かにざわめきつ。行過ぎたるに引違へて、

「ヤア彼處に大きなのが」と、竿の先に枯柴括り附けたるを持ち直して、上手へ飛び行く螢の光を追ふ少年の後より、

「アラさあちやんお待ちよ、そんなに駈ちや危ないわ。」

と瘠聲高く叫びて、小さき蠅不入のやうな螢籠を、仔細らしく兩手に腕と持ちながら、星明に

すかして細き堤を上手へ急ぎし少女の姿が、今しも一叢繁き木下闇に包まれてよりは、四五町下手の河原に客呼ぶ水菓子屋、焼餅店、松崎大尉が呼物の視機關などが、此在田川にて年に一度螢時の賑ひに、近郷り集ひし群集の財布を當て込みて喧れ聲ふり絞るが、そよ吹く風のまに／＼聞ゆるのみにて、川上の瀬音さへ遙かに物凄う響き來る曲りが淵の堰の上に、浴衣姿の男女は相對して切株に腰を掛けたり。

「留さん、全體用と言ふのは何ですえ、無理にこんな處へ連れて來てから、氣味が悪いよ。」と竺仙染の浴衣越に咬む蠶蚊を、片手の團扇に撲き乍ら、一番形の丸髻に赤い手柄を掛けたる廿二三の、首筋の綺麗な女が言へば、

「マア急かなくつても好いさ。」

留と呼ばれし三十近い小意氣な男は答へて、同じく足許の蚊を逐ひつ。

「だつて連れて來たお清や松坊などが心配して探してらだらうから、用があるなら早う言つて下さいな。」

と女は一寸男の容子を窺ひて、偕て思ひ出したやうに中腰になりて、河原の方を隙すやうに眺むるを、

「フ、ン」と男は鼻の先に冷笑うて、

「お節さん、久しくお目に懸らなかつたが相變らず美しいね。これでは敬公も留守が氣になるだらうよ。」

故と呟くやうに言へば、お節はまた向き直りて、

「オヤ留さん、冗談なんか止して下さいよ。サア用事があるなら早う。」と又急き立つるを。留吉は猶も沈着たる調子にて、

「イヤ用と言ふのは外の事でもないんだが、お節さん、過般から度々遣つた手紙は讀んで呉れたかへ。」

「……………」

「エ、お節さん、正可五年前の事は忘れまいね……コウ何で返事を爲さないの、俄變になつ

たのかい。」

「留さん、ソリヤお前無理と言ふもんだよ。」

「無理？ 何がよ。」

「だつて今は留在でも、妾には亭主のある身體だわね。」

「亭主？ あの敬の野郎がどうした。」

男は屹となるを、

「ハイ敬造はね。」

と女は何に激してか聲鋭く言放ちしが、又思ひ返して調子を沈め、

「今は誰やらの所爲で神戸の監獄に居りますそうな、そんな用ならまた今度聞きませうよ。」

突立ち行かむとするお節の袖を男はぐつと掴みて、

「オイお節、手前はいつでも己を袖にする氣だな。」

と引戻せば、

「アレ何をするの。お前こそもう忘れたかえ。あの時散々酷い目に遭せて置き乍ら、エイ憶ひ出して腹が立つ。」

意はずハラリと悔し涙を滾せば、男は片頬に寂しき笑を洩して、

「冗談じゃねいぜお節。己が台湾へ行てる後で、黙つて勝手な真似を仕やがつて。言はゞ敬公も間男同然だ。賭場を密告して赤い服を着せて遣つたのも、つまり其成敗代りなんだ。馬鹿らしい。男の生面に泥を塗られて、黙つて引込んでるやうな、ケチな意氣地無し留吉様じゃねいんだ。オイお節、過般からの手紙の返事をサア今聞かうよ。」

猶も放さぬ右手に力を込めれば、

「エイあた厭らしい、放して。」

とお節は思切てふり放さんと藻搔くに、男は獨り打顔きて、

「諾、それ程不承知なものならモウそれでよい。サア放してやるぞ。」

突放して、よろ／＼と踉蹌めく女の顔を冷かなる流眄に掛けつ。

「だがお節、覚えてやがれ。何れ近い中には手前もお袋も、一緒に敬公の居る處へ送つて呉れるから。ハ、逢へて宜かる。」

と蔑むやうに言放ちて立上れば、お節は意はず運び掛けたる足を止めて、

「何ですつて。」

少し身を捻りてふり返りざま睨りたる兩の眼は、清しけれど怪しう光りぬ。

「マア折角樂むで待てるが好いさ。もつそう飯もたまには變つて旨からうぜ。」

「留さん、そりや何の事なの？」

「コウとほけるないお節、知らねいと思つて。」

「何を。」

「何をツてエイ置いて呉れ、面白くもない。それ程解らざあ一つ手前に尋ねやうがオイお節。」

己が大阪で別れてから跡でサア手前はどうしたへ。イヤサあの腹の始末はどうした。」

「……………」

「糞ッ何も彼も知つてるぞ。此地へ戻つてからお袋と相談して、あの下之町のお熊婆に頼みやがつて墮胎……………」

と言はんとするを、

「アラマア滅相な事を……………」

と周章しく女は言冠せて後前を見廻しつ、

「そんな事は冗談にも言ふもんじやありませんよ。ありやお前さん何だわね、あの時邊かに

お前に棄てられたもんだから、ツイ心配が積つて流産たんで……………」

「ヤイ嗜くない、そんな瞞着をハイハイと聞くやうなボンヤリじやないわ。死んでも厭であ

つた筈の敬公と一緒に成る邪魔になるからツて、可哀相に何も知らない罪の無い餓鬼を、イヤ

モウかうなりや己も意地づくだ。明日にも恐れ乍らと其筋へ持ち出して、餓鬼の仇を屹度取つ

て見せるわ。待つてろよ。」

捨棄詞あらくしく、男は原來し方へ引返さむとするに、女は堪らず駆け寄つて、

「マア留さん、ちよいと待つて。」
 と袖引止めし時、目前の柳の枝より螢一つ、流星の如く水面を掠めて、向岸の闇を縫ひつゝ何處へか飛び去りぬ。

二

北條油屋町の中程の、四間間口の三間まで格子の簀りたる小綺麗な新建は、入口の表札にいかめしく書付けたる菊池敬造といふ本名よりも、仇名の勇川の方が却てよく世間に通用する、此界限にての顔役の住宅なり。

「オヤお節かへ、マア今頃までどうしてたの。最前松坊とお清とが河原で迷れたと言うて歸つて来たから、定どんに頼んで今し方田川まで迎へに行つて貰うた處なんだよ。」
 植込に臨める椽先の涼しさうな岐阜燈灯の下に、生平の座蒲團を布いて、六十近い年の割にはあらい中形の浴衣を着たる母親が、丸い脊を欄干に凭せ乍ら、團扇使ひの手を休めて言へば、

「アラお母様そうでしたか、妾は又松坊がお清と親を見てる間に、一寸あのお仙様と立談をして居ましたら、知らぬ間に兩人が見えぬやうになりましたので、彼方此方探しても居ませんから、大方もう戻つてるだらうと思つて歸つて来たのですよ。」

と言ひつゝ、お節はおなじく椽先に坐つて、一寸横手の蚊帳の中を覗き込み、モウ早や寢てますね、ほんに子供は罪のないもので。言差して何思ひ出してか吻と吐息を洩せしが、其面長の顔には蒼味を帯びて、兩鬢のほつれ毛三筋四筋。一としきり鳴る風鈴の音とともに戦ぎつ。

「眞實に憎氣のないものでな。少時は母様々とむづかつて困らしたが、色々と賺して妾が添乳を仕てやつたら直に寢入て仕舞たよ。此可愛らしい處を敬に早う見せてやり度いな。モウマア彼は半季経つたから、後半分早う濟んだら好いになあ。アラお前甚う顔色が悪いじやないかへ。どつか悪いの。」

「イエナニ少し夜露に申つたもんですから、頭痛が仕ますので。」
 「ソウ、それではもうお寢みよ。定どんが戻つたら妾が開けやうから。」

三

あゝ妾はまあ何としたものであらうか。斯かる苦しき思をする程なれば寧そ一と思ひに死度きものを、あはれ儂なき浮世に何といふ因果な吾身かな。過ぎし昔の事は醒と覺えねど、幼心に忘れぬは懐かしき父上の 佛なり。勇川の親分と四五十人の荒男に仰がれしおん身なるに、ただ一人よりなき子にはあゝも優しきものか。母上を差措かれて毎晩妾を添乳したまひしが、それさへ今は涙の種なり。悲しくも亡き數に入りたまひて十七の秋に、父上が七回忌の法事滞りなく勤め終りたる夜、密かに母上の仰せられたるお詞は、人知れず契りし留吉といふ男ある身に、何と答へむすべもなき敬造様との縁談のこと。敬造様とはたとひいかに義理ある間柄なるにもせよ。十五も年の違へるものからつねく見上と呼び妾と縁組のことなど思ひも寄らざりしに、來む霜月に祝言せねばならぬとは。わけて昨日今日正しく懷孕よと思ひ當りし身の、何として其儘居堪るべき。前後の分別も打忘れて、濟まぬ事の數々を心に詫びつゝ、窈

かに留吉に伴はれて浪花へ出奔してよりは、人目を忍ぶ新世帯に笑うて暮せしも束の間の、頓ては催ほす袖時雨の絶間なきに連れ、親に背きし不孝の罪の空怖ろしく思ひ當りし折ふし、頼める男にふり捨てられし口惜しさ、悲しさ。寧そ死なばとまで思案にかき暮れるたる矢先を、恥しや母上に探し出されて連れ歸られしが、亡き父上への義理を堅く守り、辛抱のならぬ事を黙つて堪えて下さる敬造様のあつきお情にほだされ、且つは涙片手に事を分けての母上のお詞に、つひ思ひ逼りて女心の淺墓にも、ふたり談合の末、今更ら憶出しても恐ろしき事をなしつる罪深さよ。留吉とて斯くは邪まなる人にも非りしに、偕ても變ればあゝも變るものか。去年の暮に此地へ歸りしと聞きて驚きたる間もなう、人傳てに寄する手紙。見るも腹立たしく其儘突返せしが、それを根に持ちて母子ふたりを、密告せむとの言條。良人の不在になりてよりは一入心を配りて身を謹み、今日まで外出もせずでありしものを、ア、悲しや、エイツ口惜しやと、お節はふしどに入りても溢れ出づる熱涙に、あはれ昨日換へた許りの枕紙をしとど濡らしつ。

「オ、定どん、遠い處を御苦勞だつたね。お前の行たのと丁度掛け違うて歸つて來ましたよ
 (少し小聲になりて) ソウ、あの留公に逢うたの。ナニいつもニコニコしてるのは彼奴の癖さ。
 棄つてお置き。ホ、……今に敬が歸つたら素つ飛んでしまふわね。サア早うお寢みな。ナニお
 清の寝相なら今に始まつた事じやないよ。」

隣の部屋にてはいつに變らで浮々と陽氣な母の聲。お節はいよく思ひ惱みて、短き夏の夜
 のひとしほ短く、微睡みもせで悶え明しぬ。

お節は其翌日より引續きて枕に着きしが、半月許り過ぎて後ち漸く病床は離れしかど、肉殺
 け艶褪せたる頬には、壓の痕をも止めずなりて、蒼白う細りたる面色に、間がな隙がな思案に
 沈み、時には庭下駄引掛けたるまゝ裏口より出で、川の堤、山の麓など、そこはかたなく逍遙
 ひ廻りたる後ち、宛然夢の覺めたらむやう、茫然となりて歸り來る怪しき舉動の重なるに、母
 も萬一の氣遣はるゝものから一方ならず胸を痛めて、其都度密かに人を頼みて追尾させしが、
 いつとても同じ事を繰返すに過ぎざれば次第に心も弛みて、果ては夜中に姿を見せぬ事あるも

さして心にも止めで、己れ代りて子供の添乳などするやうなりし程に、いつしか夏過ぎ秋去り
 て、忙しき年の瀬も先づは目出度く昨日と超えてけり。

四

身柱の棟とする程厭な思ひして、昨晩も餘儀なう逢ひたる留吉が事を密かに思ひ泛べて、お節
 は中の間の炬燵にわが子の添乳し乍ら、覺えず身を顛はせて手枕にらせたる折しも、「松坊は
 もう寢たかえ」と、不意に母の襖を開くるに驚きて半身を掻ぐれば、母は早や炬燵の向側へ膝
 を入れて、

「マア寒い事ね、最前から又チラチラ降り出してるが餘計に積らにや好いがな、併しお前モ
 ウ明日の準備は出來たのかえ。」

「ハイモウ羽織の衾丈けくけ直したら好いのですが、この兒はあの黄八丈でようんいます
 ね。」

お節は母と對座に坐り直して、吾子の上の蒲團を軽く押へつ。

「あゝそれで良からうよ。」と母は少し詞を切りて、

「併し手早うせぬと明日が早いよつてな。源さんも播但鐵道の一列車には屹度間に合ふやうに車を拵えて、宅へ来て呉れるやうに言うてゐたよ。源蔵と一緒に迎ひに行て呉れるなら、神戸の勝手もよう知つてるから都合が好いな。」

と話を向けられて、お節はいかにも氣の無さそうに、

「そうですね。」と軽く受けて窺と俯向くを、母は猶も心注かで、

「どうせ明日は午後の事でもあり、敬も疲れてるだらうから、神戸で一晩泊つて北條へは明日に歸るやうな都合に仕てお呉れ、其積りで若い衆にも集つて貰はうから……。」

言差して片手を洋燈臺の下へ伸ばし、拾ひ上げたる長煙管に小箱引寄せ一服喫み掛けしに、斯うなればいつも話の長引く母の辭をお節は知れることとて、

「ちよいと御免を」と立ち上りて、針箱運び來りつ。

いつになう針の運びの撈らで、一針毎に深き思ひの結ばるゝものから、羽織の衿付のみに甚く夜を更かして臥床に入りしが、此一年間待ち焦れたる良人が、いよく明日には出獄する事とて嬉しさ堪へがたき中にも、かの螢狩の夜より端なくも心の半面に刻まれたる恐怖の念の、頻りに身を責むるに、夜の更くるにつれ心臓の鼓動も益々高まりて、果ては胸中に怪しき火焰の熾んに燃え上るが如き心地して、いつか茫然とお節は我を忘れぬ。

X X X X X X X X X X

「マア貴郎ようお歸り下さいました。コレ松坊や、この小父さん誰れ？ ホ、貴郎、それでも覚えてます事ね。サアちやつとお坐りしてお辭儀しな、お父様に好いお土産を貰うてあげますよ。アラ貴郎、まあどうなすつたの。エッ何と仰しやいます、そ、それは……貴郎餘りで……ま、まあ一寸お聞きなすつて。これには段々譯のあります事ですから、モシお母様、どうぞ一緒にお詫びなすつて、呀！ 貴母迄が同じやうにエイどうせう……。」

半時経たぬ間に湊川傍の監獄署に到りて車を下りたるお節は、見るから殿めしき門を潜らむとして、また甚く胸の動悸を高めしが、控所の方へ近づくに従ひ足許自ら顛え出して、顔色いとど蒼ざめ行くに、四五間行越したる源藏はふり返りて立ち戻り、

「オヤ姐己、どうなすつた。大層顔色がお悪いやうだが、まあ待ちなせへよ。」
と脊の松吉を揺り上げて片手をお節に與へつ。

「サアモウ直そこだから、モ少し我慢さつせへ」と勞り哭るゝに、お節も漸く控所に入り片隅に腰を掛ければ、

「サアまあこれでも一杯呑んで、ゆつくりと心を落着けなせへ、モウ兄貴も直に出て來ませうから」と、源藏は借り來りし湯呑を渡すに、

「有難うよ」と呑み干して、稍心を沈めしお節は、
「大きにお世話さんでした。ツイ乗り馴れぬから汽車で眩暈たやうですが、お蔭でもう大丈夫です。お前さんお氣の毒ですが、妾は此兒と此處で待つて居ますから、一寸彼方へ行つて

容子を聞いて來て下さいな」と言ふに、源藏は頷きて、

「エイようごわす。まだ少し早い筈ですが、彼方でもう一遍聞いて來ませうよ。」
と立上りて出で行くに、跡に残りしお節の胸は又もや擾ぎ始めつ。

頓て初めの勢に引變へて、悄然と頭を俯垂れながら歸り來りし源藏は、物をも言はずでベタリとお節の隣へ腰を下すに、

「源さん、どうでした、まだ早いのか？」
お節は不安の面地にて尋ね掛れば、源藏は物と肩より深き溜息を押し出して、

「不可ねい姐己、兄貴はまた例の俠氣を出して今日満期になるといふのに、一昨日の晩方、多勢の難儀を見かねて、評判の意地悪の看守を斬つたとやらで、昨日からまた裁判に廻されてるから、當分は面會する事さへ出來ねえとよ。」と聞くより、

「エッ！」
と目を睜りたるお節の、ハツと愕きて無量の悲みを湛へたる心の半面には、あはれまさしくも、

喜びの反影を宿したりき。

評 この人筆録峻峭、刺すところ手ごたへあるは喜ぶべし。殊にお節が喜びの反影を宿したる一刹那に至りて「人間は妙なものだ」といふ感あるを禁ぜず。着眼おもしろし。

(鳥水)

必ずしも人物の多きを須るす、経路の錯落參差を極むる、蓋し斯の如きは稀に、着筆常に事件の波瀾を展開して、緯々毫も狼狽の態を示さざるもの、辣然作者の如きまた多しとするに足る、只お節の煩悶やよし、其薄弱主持なきの心性を叙する處餘りに過度なるには失せずや。殊に末節の「喜びの反影」の如き餘りに抽象なるにすぎて、前後の事情に照應するも、何故の喜びなるかを解する能はざるの恨あり。随て鳥水が感とか云ふものも、或は意義の餘りに漂渺なるに、聊か戸惑ひの感あるを禁ぜず。抑獨り我、偏視の所爲にや。

(倚樓)

此編、中ころの「夢」を應用したるが如き、寧ろ陳々腐々、一點もその爲めに作の巧妙なるを加へざる也。

(倚二)

註、倚樓といふは當年の千葉龜雄氏の別號也

お節といふ女の、倚樓が言の如く薄弱主持なくして、且つ貞操の觀念に乏しきは、聞きたる所にて明かなり。さる女がたとひ初めは強ひられてにもせよ、そは往日の情夫なる留吉、其留吉と再び不義の逢瀬を重ねつゝ、何時までもこれを憎み厭ひて夢中にまで「けがらはし」と叫ぶやうなる心狀にてあるべきか、これ問題なるべし。

(白蓮)

お節が心に宿せる「喜びの反影」といふものは、兩様の意味にとらる。一はこの刹那彼が心に幾分の不義の繼續を喜ぶの念閃きしと見るなり。一は單に一時の急場を免れたる喜びと見るなり。「人間は妙なものだといふ感あるを禁ぜず」といへる鳥水は、大かた前の解釋を取れるならむ。されど余は前來の描寫より推して作者の意は後の方にあるを信す。

(白、二)

夢は陳しと雖も必ずしも排せず。唯をかしく三段に疊みかけたるが感心せず。

(白、三)

明治三十三年二月十五日發行、雑誌「文庫」第拾四卷第貳號所載、ペンネームX字庵

涙川

其 一

一面に花筵敷き詰めたるやうなる野原の間を、蜿蜒と縫うて流るゝ涙川の、遙か東手の山麓より見え初めて西の森蔭に隠るゝまで、約そ半里許の間に、三つの橋架りてあり。上下兩つの橋は何時架けた儘にや、いと古びて人通るさへ危な氣なる土橋なれど、中の橋のみは去歳の春煙火まで打揚げて開通式を擧げた丈ありて、いと美々しく、此邊には先づ珍らしきペンキ塗の欄干さへ附けてあり。縣道に當ればなるべし。

縣道は橋を渡りて五六丁上手の戸田村まで川に沿うて一直線に上り、其中程の川邊に衣掛柳と言へば、此界限に誰知らぬ者としてなき一抱へ程の大柳あり。緑の色濃き長き枝先を川面に垂

れて、そよ吹く春風にゆらくと靡く其根元の堤には、青草生茂りて其間に葦、蒲公英、蓮華草などの花、今を盛と咲き亂れ、名も知れぬ小鳥の川邊に下り立ちて、過ぎ行く春を知らず顔に、樂しげに謳へる態など、いと長閑なり。

柳の根元なる青草の上に、摘菜籠片傍に置きたる儘、足投げ出したる十二三の少女は、矢絰の平常衣に巾狭き紫縞子の帯胸高に締めて、宛然畫に描いたやうなる可愛らしき顔に、黒目の勝の眼を殆ど閉いだほど細う開きて、今しも地平線下に沈まんとする夕陽の名残を止めたる東の山の根に、早や朦朧と立ち罩め初めたる霞の幕間より、チラホラ見ゆる彩色畫のやうな樹々の梢を、さも樂しげに眺めつゝ、我を忘れし様に恍惚となりて、唐人髻に結ひたる頭の簪花に、一双の胡蝶の、上になりつ下になりつ戯れ居るも知らず貌なり。

裾の短き木綿紵の袴に、淺黄絞の兵兒帯無造作に締めて、獨逸帽阿彌陀に被りつ。薩摩下駄ゴロつかせ乍ら通り掛かりたる十四五の少年あり。背こそ高うもあらね、色こそ黒けれ、天晴れ男らしき顔附見るから愛らしく、取分け見まさは其涼しき眼許なりけり。今しも少女の姿

を見るより、嫣然と豊けき片頬に笑を泛べつ。足音忍ばせて後ろへ廻り、突然兩手を延ばして少女の眼の上を睨と掩へば、不意に驚きて少女は手をふり解かむと身を藻掻きつゝ、誰様ですか、こんな悪戯なさるのには。お放しでないとお母様に言告げますよと瘖聲にて叫ぶに、少年は意はず吹き出して、わ…た…し…と言ひつゝ、手を解きも敢へず、腹抱へて笑へば、少女は腹立しけにふり返りしが、顔見るより少し面を和けて、オヤ俊夫さんですか、眞實に酷い事を吃驚しましたよ、これ御覽こんな髪が、と言ひつゝ、片手を上げて鬢の亂毛を掻き上ぐれば、少年も今更氣の毒けに、秀ちやん悪かつたよ勘忍して呉れ給へ、そんなにする積じやなかつたがね、つひ君が餘り澄し込んで睡そうに仕て居たものだから目を覺して上げたのだ。併し君はもう歸るんだらう。さあ一緒に歸らうや。籠は僕が持つて上げやうから。オヤ澤山摘めた事ね、もう土筆がこんなに伸びてるの。と籠の中を掻き廻せば、俊夫さん厭ですよ、そんなに仕ちや皆折れて仕舞うはね、さあ返して頂戴。と少女は奪ひ返さむとするを、少年は目より高く差上げて、いや僕が持つて上げると拒む。イエ妾が持ちますからお返しと迫る。イヤ返さぬ、お返

しと互に争ひて奪ひ合ふ中、籠は兩人が手を滑りて倒まに地に落ち、半日の丹精込めたる獲物は、バラバラと四邊の草の上に散亂しぬ。
 兩人は驚きて共々に拾ひ集めつ。這度は争ひもせで少女の手に提げた儘、今しも夕霞の中に葬られむとする戸田村を望んで足を運ぶ途すがら、さも睦じ氣に笑ひ興じ合ひて、互に何をか問ひつ語りつ。

其 二

オヤそう、眞實に不可ない事ね。妾些とも知らなかつたのですよ。實は過般から宅の糸ちやん（妹の名）が虫を出して悪かつたので、妾も御不沙汰仕てましたの。じやあ歸つてから阿母様にそう言つて、今晚でも一度お見舞に参じますよ。だが今小母様がお悪いと貴郎は眞にお困りでせうね。小父様もお留守中だし。と言差して少し詞を切り、併し臺灣からは此頃何ぞお消息がムいましたか、と小さき眉を擧めつゝ首差延べて尋ねれば、少年はいつの間にか首俯垂

れて足の運びも一段鈍らしつ。ウム有難うよ。格別の事でもないんだらうが、此前の日曜の晩に臺灣から長い手紙が届いたの。するとお母様はね、何時でも僕に見せて下さるのに、今度に限つて些とも見せて下さらなくつて、其晩からお就臥なされた限りお鬱ぎなすつて、其儘お起きなさらぬので、何だか變だと思掛けて見みや心配でく堪らす。段々とお尋ねした處が、何でもお父様は先頃から臺灣でお不快つて此頃入院なすつたそうで、それ故……それにお母様までがお悪いのだから、僕一人が心細くてく。君許とはまるで親類のやうな間柄だが、外に親類と言つたら東京に僅つた一人の伯父がある許りサ。だから僕は何だか頼りなくて……とまでは、沈み勝に言終りしが、今は悲しさに堪へ兼ねけむ、面を背けて双の眼にはいつしか露ぞ溢れぬ。男がそんな氣の弱い事で、いつもく強いつて威張つてなさる癖に。と勵ます少女も亦聲濡みぬ。

猶も互に語り續けつ、村端迄歸りし折しも、一丁許東手の鎮守の杜蔭に遊び戯れ居たりし四五人の童兒、兩人が姿を見るより互に何事か囁き合ひしが、やがて打領き様バラバラと馳せ

來て兩人が行手に立塞りつ。皆口々に、よう金井君お芽出度う。これは池村さんお樂み。御婚禮はいつ濟んだの。孩兒ちゃんは何時出來ますの、と散々冷かして掛りぬ。

耳朶を茜色に染めて俯向き乍ら、手に提けたる籠打頭はせ。今にも泣き出さむ許りなるお秀を後に庇うて、俊夫は疳癬の青筋を額に現はしつ。袖を捲つて力瘤のある兩腕を突き出し乍ら聲鋭く、失敬なことを言ひ給ふな。僕と池村さんが一緒に歩いたからつて、何がそんなに可笑しいんだ。愚圖々々言つちや量見仕ないぞ。君達もそんなに喧嘩が買つて欲しきや何時でも買つてやるぞ。さあ何奴なりと掛つて來い。過般の僕が手並を忘れやがったか、馬鹿奴が。と睨み付けて叫べば、童兒等は一時に聲を合して哄と笑ひつ。アハ、やれ可笑しいぞ笑うてやれく。恰で飴屋の看板のやうな顔附で怒り出したぞ。いくら手前がそんなに威張つたからつて僕等が怖がると思ふてるか。馬鹿とは手前の事だ馬鹿奴。悔しう思ふならさあ掛つて見ろ。と中にての餓鬼大將らしき十五許の兵兒帯締めたる卷袖が、先づ兩手を廣げて罵れば、直ぐ其傍の片袖を半ば綻はしたる唐茄子顔は、そうだく、手前がいくら嗚つたつて、からもう駄

自作だよ。全體時節が違ふは、時節がサ。手前がお得意の親父、いつでも將軍より豪らいやうに吹聴して居た親父が、今度臺灣でのあの醜態を見る。歩兵の大尉で候のつて腎が呆れらあ。どうだえこれには一句も無からう。胸にギツクリ五寸釘かね、醜態見ろい。と言ふ尾に躡いて青鼻汁垂らしたいが、ぐり頭は、ほんに日本中何十萬からの軍人の中で、チャンや土匪に負けて遁けたのは手前の親父一人限りサ、そんな弱虫の小作がいくら瘡我慢を張つたからつて叶ふ物か、恰で支那が日本へ對うて来るやうな物だ止せ。それとも口惜きや掛つて來い。と憎さけに罵りつ。片手の竹棒を小腕に抱へ込み、居合腰になつて構ふれば、俊夫は赫と急き込んで、馬鹿言へッ。失敬な事を吐すな。お父様が軍に負けて遁けたなんて、僕のお父様は憚り乍ら日本男子だぞ。陸軍の士官だぞ。從六位で勳五等だぞ。何と思つてやがる白痴奴が。遁けたり隠れたりなさるやうな弱い人でないは。そんな言を言つてる間に顔でも洗つて出直して來い。と賣詞に買詞、あらくしう叫べば、手前こそ面拭いて來やがれ間拔野郎奴。此頃の新聞に手前の親父が臺灣で土匪に負けて、卑怯にも遁け出した事やら、軍法會議とかに附せられてる事な

どが詳しう記いたる事を知らないのか盆槍奴。と處々に裏地の見えたる小倉服が口穢く罵れば、續いて恥不知奴、國賊奴、弱虫奴、腰拔奴、醜態見ろ。わあいく、と散々に囃し立てられ、俊夫も今は堪らばこそ、腹は熱湯の如く沸えくり返りて満面に朱を濺ぎつ。小蛇のやうな青筋をうね／＼と二つ三つ額に現はして、何を失敬なツ、と叫ぶや否や、鐵拳ふり廻して四人が中に割つて入りぬ。

倒れては起上り、突かれては武者振り付きつ。俊夫は一生懸命に力を盡して争へど、衆寡敵し難く終に振ち伏せられて、四つの鐵拳は雨霰と頭上に降りしきる。アレ勘忍してお上げ。そんな酷い事はせず。と目を濕せ乍らおろ／＼聲に叫びつ、傍に見て居るお秀は氣もそゞろ。

其 三

我家ながらも、面に腕に脚に疵持つ俊夫は、窃と音せぬやうに門の潜戸を押明けて足を忍ばせつ、やう／＼玄關迄迫着けば靴脱石の上に見慣れぬ男下駄一足行儀能く列べてあり。思はず

小首を捻りて猶も靜に勝手口へ廻り、臺所へ入れば、薄暗き洋燈の下の長火鉢に凭れて、火を吹いて居たる老婢はふり返りさま、オヤ若様、大層晚いじや……頓狂聲高う言はむとするを、手を振つて制止せよ。オヤ此まあお召は、ヤ、何處でこんなお怪我を。と猶も目を圓うして問ふに能くも應へで奥の方を一寸覗き見て俊夫は、婆や、お客様は誰様だへと耳に口寄せて尋ねれば、池村の旦那様ですが。と老婢は不審な顔附にて俊夫の顔を見詰め乍ら、さあお夕飯をと立上らむとするを、出さなくとも好いよ。僕は止すからと言ひ捨てつ。中腰になりて拍子抜したる老婢の、猶も物言はむとするを聞かむともせで、拔足差足、次の間より洗足の儘庭の植込へ。

行燈の光に男女の影法師ぼんやりと大きな障子に映りて、今しも男の少し動くと共にボンと灰吹敲く音して、成程それは如何にもお察し申す。私も御主人とは幼い頃からの馴染で、姫路の塾へも三年程は一緒に通うた事もありますれば、大抵御主人の御氣風も存じて居ますが、豪膽でこそあれ中々以て今度のやうな事をなさる金井君ではないと堅く信じて居りますが、此

頃新聞の記事と申し又此お手紙と言ひ、どうやら私も夢のやうな心地がして頓と譯が解らぬやうになりました。と言ひ差してほつと一息吐き、やがてまた調子を改めて、家内も一應お見舞旁お伺ひ申度いと申し居ましたが、なにぶん此頃は世間の口が五月蠅うムいしますので、今後暫らくは故と差控へさせましたから、どうか不悪お察しを。と語尾をひくめて詞を切れば、女の頭は次第に下りて、ハイいつも乍ら色々と御親切に有難う存じます。何の妾も軍人の妻でムりますれば、よしや良人の屍が野原に曝されるにもせよ。御國の爲と申すなれば決して未練もムりませぬ。イエ却て本望で悦びませうなれど、申すも愚痴の至り乍ら、百千年経つても取返しのならぬ浅ましい事を仕て呉れましたので、妾は残念なやら心外なやら。此頃は夜もまんじりと致さず其事許りを悔んで居ります。妾の口からかしいではムいませぬ、良人に限つてそんな事はよもやと幾度思ふたか知れませぬ、現在此手紙が何よりの悲しい證據。良人が今度の仕業は、そもやいかなる天魔に魅られてか妾は何だか夢のやうで……それに可哀想なは俸の俊夫でムいます。何も譯を知らばこそ色々と親切に妾をいたはつて呉れますにつけ、其

いちらしさは又、思へば思ふ程妾は此胸の中を搔き撈られるやうな氣持が致しまして、俊夫さへなくば疾に此玉の緒も斷つて捨やうものと、思詰めました事も幾度ムいましたやら。池村さま、お察し下さいませ。と頓に激してか低くて力の籠りたる聲いとゞ打顫へて聞えしが、俯向くに連れ障子の影は次第に下りて、果ては腰板に隠れ終りしが、四邊を憚る忍泣の聲暫しは歇まずして、續きつ斷へつ、悲し氣に洩れ聞えぬ。

サ、こんな事は夢更言へた義理でなく、又申度もムらぬが、まあ悪く取らずに能つく聞いて下さいませ。此貞藏も男の片端ですもの、互に心打明けて一旦義兄弟とまで盟つた金井君が、假令誤つてどんな大罪を犯されたにせよ、畢竟其罪をこそ憎みもすれ、其の人を憎むやうな輕薄な心は持ちませぬ。が此處の道理を能く聞分けて下されや。貞藏不肖なれど只今は此戸田村の長を勤めて居る身分、其村人共が皆々申合せて、軍人の義務を缺いた人の家族には此村も立てる義理はないから、斷然此村から……お氣に障へて下されては困りますが、結局申難いが此家の持主、且つは村長の私へ家明させよとの嚴しい談判。何のく此貞藏も五尺の男一貫

骨もあれば血も涙も持つて居ますれば、先方の申すが理不盡か、但しは此方が少しでも筋道の立つて居る事であれば、一步も譲らずに見事跳ね付けませうし、又我意を立て徹しても見ませうが、どうも這度の事許りは貴女の前乍らどうしても……世間狭いは田舎の習ひ。幸ひ東京にはお兄様もムる事なれば、一層の事に思切つて暫らく東京へお出なされて、程なう此方のほとぼりが冷めた頃に、又々改めてお歸りなされては……、言難い事をこれ程迄に申した私が心の中も、ちつとは御推量下されよ。と聲曇らせ乍ら言終りて鼻打かめば、泣々それに應ふる女の聲。またそを慰むる如き男の聲。夜は更けて四邊靜かなれど聲低うして能くは聞えず。

其 四

どんより照らしたる朧月の、今しも雲に隠れてより四邊遠に暗うなりて、障子に映れる兩人の影法師いよく明かなれど、聲は次第に低なりて又聞かるべくもあらざれば、椽先の熊笹の蔭に蹲踞たる俊夫は音せぬやうに臺所へ引返して、火鉢の傍に坐りたるまゝ、夜船を漕げる老

婢に床延べさせて枕に着きぬ。

臥床の中に俊夫は様々の念慮を胸に泛べて、過去を懐ひ、現在を思ひ、将来を想へば、中々に眠らるべくもあらず。客去りて後ち、柱時計の十二時を報ずれど、心臓はいよ／＼鼓動劇しくなりて神経は益々鋭く、眼さへ中々に牙え渡りて涙の宿りつ。心は千々に碎けて寝返り幾度、溜息幾度の後ち、いつしか三時を過ぎしころ疲勞に眠りぬ。

欄子の障子に映る日影やう／＼高きに俊夫は目を覺しつ。起上りさま顔洗ひて先づ奥の間に行けば、母は床の中より聲音に耳敏て、髪亂れたる頭を重たけに掻げつ。蒼白き面長の顔を此方にふり向けば、お母様お早うムいます。お安排は如何で、と言ひつゝ俊夫は枕元になじり寄りて、昨夕僕はお友達の宅で少し暇取りて歸りましたら、丁度池村の小父様がお出でになつて、何か御相談遊ばしてムつた様子でしたから、わざと控へてお先に就臥せて戴きました、その後御気分は追々とお快しうムいますか。と何気なう粧うてそれとなく母の様子を窺へば、それかあらぬか、母は何となう穩かならぬ面地にて、オ、別段變りはないが少し其方に言うて聞

さねばならぬ事が出来たので、何れ後程詳しう咄そうが、兎に角、急に東京へ移轉す事になつたのだから、今日は學校へ行つたら其積りで、歸りに片附けてお出で、と言差して、不圖面上の疵に目を着け、オヤ其方の顔はどうしたのだえ。と稍驚きて尋ねれば俊夫は少し口籠りて、ハイアノつひ樹の枝で引掻きまして、と漸く言紛らせしが何となう拍子の抜け、心の中に期せし事尋ねも得せで周章しく、それではこれから行つて参ります。と言ひつゝ立上れば、じやあ行つてお出で。だがね、池村さんへは行かないやうにお仕よ。との母の言葉を後に、ハイ畏りましたと言捨て、俊夫は靜に出で行くを、母は濕める眼に無量の思を込めて見送りつ。急ぎ枕を引寄せぬ。

紺小倉の制服に獨逸帽被りて、半袴の足先に半靴穿き占めつ。辨當片手に鞆を肩に引掛けて、いつもならばお秀を誘うて、途すがら一緒に面白う軍歌や唱歌を謡うて行くべき半里の道を、頸垂れて絶えず溜息を洩らし乍ら、足許も鈍り勝に曳すつて行く俊夫は、村端の辻に寝て居たるお氣に入りの尨犬が目を覺して嬉し氣に尾を振りつゝ足元に纏はり付くを、五月蠅氣に蹴飛

ばして通り過ぎぬ。

さあかうなる事とは昨宵から覺悟は仕て居たものゝ、今更何となく胸が擾いでならぬ、それに付けてもお父様は何故遁けたりなどなすつたのだらうか、薩張合點が往かぬ。いや嘘だく。どうしても嘘に相違ない、宅のお父様に限つて屹度そんな卑怯な事はなさらぬ。けれ共昨夜お母様と池村様とのお話振ではどうやら……が、僕は何處迄も嘘だと思ふ。よしや眞實であつても僕丈は全く嘘だ……。けれ共此村の奴等も随分薄情な奴等許りだ。お母様と僕とを此村から敲き出すなんて言つてやがるそのだが、ほんに忌々しい奴等だ。エ、憎い奴め、忘れやがつたか、一昨年の秋お父様が豫備召集で大阪へお越しなされる時などは、涙川まで村中總出で送つた癖に。エ、口惜いや、おのれ見てやがれ、今に僕が立身して赤帽を被つて馬に乗つて勳章を下けて、立派な強い將校になつて見せて呉れるは。と齒切りして地團太を踏みし時は、身は早やいつしか學校の門前に來て居ぬ。

其 五

號鈴鳴りて直ちに教場に入れば、先づ最初は倫理科にて教師は忠君愛國の四字を諄々と説いて後ち疑問ありやとの詞の下に突立つたる一人は、確に見覺ある彼の鎮守森の卷袖なりき。先生、只今承りました通り我帝國の軍人は、皆忠君愛國の志が篤い人許りでありますのに、何故此頃の新聞に臺灣の退却將校の事が記いたるでせうか。現に吾郷の金井大尉も其一人で吾村の名へ泥を塗りましたが。と得意氣に質せば、先生一寸答辯に困みて、そんな事は言ふ物でありませんと大喝一聲。滿場の生徒の視線を悉く己が身の上に注がれたる俊夫、顔赧めて頭を垂れしが、其背には汗や滴りけむ。

放課後俊夫は遊歩場に出でしかど、平素の快活に似もやらで人目を避けて裏の片隅に悄然と佇みつ。物思に沈み込める折しも、何氣なう友と連れ立ちて通り掛りたる秀子と不圖顔見合せ、俊夫は思はず口動さむとして一二歩進み出でしが、何思ひけむ俄に悄氣返りて引返せば、秀子

も心ありてか極り悪氣に視線を轉じて、表の方へ足を早めぬ。
 後見送つて俊夫は深き溜息を洩らしつゝ、頸垂れし儘、兩眼に涙を泛べて茫乎として居たる折しも後ろより不意に突當りざま僅かに、失敬の一聲を残して表の方へ飛び行く後姿を、よろよろと踉蹌き乍ら倒れむとせし足許をやうく踏止りて眺むれば、どうやら見覺のある小倉の破れ服！。

再び號鈴のひびくに、俊夫は教場へと急ぐ途すがら、皆我を見て笑を忍ぶやうなるに訝しくは思へど其の儘教場に入れば、五十に餘る場内の生徒共、皆一齊に笑ひ出して中には腹を抱へて噴飯すもあり。制すべき教師も亦口を掩へぬ。餘りの事に俊夫は悲しさの胸に逼りて、眼の底より突掛くる涙を窃と手の甲もて拂へば、後の生徒が漸く笑を忍びて、君の背にこんな物かと言ひつゝ、取つて渡せしは、糊だらけの半紙一面に墨黒々と「腰拔士官の卵」とは情けなし。緒ては……………。

俊夫も今は堪り兼ね、遽に腹痛とて教場を飛出しつ。半里の道を夢我夢中に辿りてやうく

吾家へ歸るや、老婢の物言ふに應へもせで、矢庭に奥の間に駈け込み、床の間に飾りたる父の肖像畫を外しも敢へず駈と兩手に握りつめたる儘、物をも言はで血走る眼にちつと見詰めて、霞の如き涙をホロホロと溢しぬ。

物音に驚きて次の間よりよろめき乍ら出で來りたる母は、此光景を見て先づ吐胸をつかれつ。躍り立つ胸を強ひて鎮めて、心靜に慰めつ賺しつ問糺し、涙に語り涙に聞いて、果ては母子互に抱きめめたる儘、泣いてく泣沈みぬ。

X X X X X X X X

空なる星影次第に疎らになり、東雲やうやう赤うなりぬる頃、霞立罩めたるほの暗き川上方より堤に沿うて驀地に馳せ來る二輛の人力車あり。中の橋詰に到りて暫し立寄りしが、頓て又もや轍の音して動き初めつ。いつしか姿さへ響さへ霞の中に葬られ終りぬ。曩に車の停りたる橋詰には、朧氣に見ゆる大小三つの人影猶ほ木偶の如く突立ちたるまゝ、暫しはそとだに動

かす。あはれ行く者、送る者、浮世をうらむ袖のしぐれに、涙川の水嵩しばしや増さむ。

評 前作「野嵐」と伯仲の間にあり。哀れなる母子の境遇を寫して、讀者をして彼等と共に、或は怒り或は悲ましむ。小童小女等の言葉ちと大人びすぎたりと思はるれど、小疵深く慥むに足らず。もし其文の全體を評せむには、曩に烏水が用ひし細心鏤刻の四字を借り來りて已まむのみ。

(白蓮)

明治三十年九月五日發行、雜誌「文庫」第六卷第六號所載、ペンネーム極吉

狹霧

妾などは此通り他家へ嫁かすに自宅に居てさへも、良人への氣苦勞が絶えぬ程なれば、よしや姑御はあのお好性の叔母様なればとて、苟且にも心を許さず何事にも氣を注げるやう。それに久雄さんもあの御氣性の事故、其邊の心配は要らぬやうなもの、そこはまた殿御の事なれば、従兄妹馴染の昔のやうに餘りな氣儘を言うては、愛想竭かされやう程に、必ず省むだ上にも省むで……と、互に母なき身には一入睡じき姉上の細々としたるお詞。いつそ身にしみ渡りて泌々と嬉しきにつけ、この十七年來寢食を俱にせし姉上の膝下を、今更ら離るゝ事の如何にも愁らければと、聊か涙ぐみて言へば姉上は遽かに頬笑み給ひて、さりとは福ちゃんも甚う孩兒になられたそうな。追付け其頭に丸鬘結はねばならぬに、早う其風姿見度や。とまた餘事を

言うて取合ひ給はぬに、寧ろ面羞く、意はず颯と兩の耳朶綴めてより間もなう、嬉しく耻しき夢心地の中に此家へは嫁ぎ來つ。

今は亡き岳父上此世に在せし振分髪（むかしの）の昔、良人には伯父（おぢい）に當れるわが父上との間に、結び置かれし兩人が妹脊（いもせ）の約束を、五歳前忘れも得せぬ卯月八日の夜、四海浪靜かに祝ひ納めてより驚鷺（おどろぎ）の契りいや睦（むつ）じく、次の歳の夏には早や此一雄の母と爲りて、逢ふ程の人々にお目出度やと言囃（いひばや）されては、おもはゆさに時ならぬ紅葉散らせつゝも、猶いと嬉しかりき。

其翌年の丁度今日此頃、一雄の初誕生濟ませて後ち、良人は日頃の疲勞にもや劇しき腦病の發りしが、醫師の勸告の黙止難きに、折よくも役所は暑中休暇中なりしものから、少し遠けれど箱根にて病を養ふこととなり、妾は其看病に一雄を連れて隨（したが）ひつ。暑き眞夏を汗も流さで塔の澤に送り過（す）ごし、良人の病氣のおこたりしに心もおのづと勇みたち、東京より日光への見物。ただ理由もなく樂しきが中に濟ませて、わが家に歸りしは萩の上風、いつしか吹き初めし九月の中旬なりけらし。その思ひ出も早や三歳の昔となりぬ。

女の厄年とか聞ける十九の歳も、先づは芽出度き良人の本復（ほんぶく）に免がれてより、日に増さり行く一雄可愛さに、浮世の憂苦は跡形もなう忘れ果てつ。いつぞや姉とよしなき事に心傷めし餘女心の互に詮術もなく程近き易者の許（もと）に占を請ひたりし時、廿歳は凶ぞといはれしを、信ぜしとはあらねど、何となう底氣味（そこき）悪く思はれしその歳も事なう過ぎしに、實に中るも中らぬも、いづれ八卦はかうしたものとほゝゑみるたるも仇なれや。芽出度く二十一の初春を迎へし去歳の正月の、まだ繩を外さぬ十日の夕間暮（ゆふまぐれ）、喘ぎく驅付けたる實家の使の口上に打驚き、取る物も取り敢へず擾（さわ）ぎ立つ胸をおし鎖めて、日頃は頭の鬻（まげ）の崩るゝを氣遣はるゝほど健脚（けんきゃく）の源太（車夫）が宙を飛んで挽き行く車のいとどかしき心地して、やうく著（つ）きし實家の前。いつ見ても懐かしき門際（かどぎわ）の柳に、片鬢掠（かたびんかす）められたるも心注か内玄關（ないげんくわん）に入れば、門口に停りたる車の音に、先づ顔見せしお清（下婢）の、常になう會釋（あひやく）もせで只管急がすに、言問ふいとまもなく、とつかはと奥へ通れば、噫（あゝ）及ばざりき、今の今まで心の中に、身に代へてまでもと祈りし姉上は、御魂（みたま）既に空しく天に歸りて、一昨日わが家にて樂しく語合（かたが）ひたるぞ此世の名

残とはなりしなりける。

これが海山超えての他處ならば詮なけれど、さりとは眼鼻の間としも隔てざるわが家に、こんな悲しい事となるまで報らせて給らぬは、餘計な心配させまじとお慈悲かは存ぜねど、それが寧そお怨めしくて……と女心の淺果敢さに前後を忘れて泣き伏しつゝ搔き口説けば、いつの程にか後追うて驅付けられし姑母上の隣に坐り居給ひしが、福、愚痴も時に由るぞかし、寸刻も待たぬ此急病に、何とて其猶豫のあるべきかはと、たしなめ給ふに、ハツト心注きて少し面を擡ぐれば、白帛もて面を蔽ひたる亡姉の枕元に、悄然と腕を組み坐り玉へる父上、策造上の、無量の悲みを罩め給へる四つの眼には、見と光る露のしら玉いと繁くおはしき。

春とはいへど廣き此世に二世かけし良人を除きては杖とも柱とも頼める只一人の姉に別れし身の何樂しかるべき。梅も櫻も涙のうちに咲き散りて、いつしかふりみふらずみ小歌なき五月雨に、頭重き期とはなりつ。

浮世のまゝならぬは今に始まりし事ならねど、弱り目に祟り目とや、良人は姉の喪中の頃よ

り、またもや宿痾の發り初めて打惱まれしかど、折ふし役所にさる大切なる仕事のありて、いかにも手放し難ければとて、強ひて日々出勤せられしに、或日いつになう夜に入りて歸られしが、玄關まで出迎へたる妾にいと機嫌よき調子にて、やう／＼重き任務も仕遂けしゆゑ、明日よりは公けの暇を得てまた箱根に行かばや、と仰せられつ。久し振に一雄の楓葉の如き手に曳かれて居間へ通られ、快く夕餐を終へて臥床に就かれしが、其夜半、不意に匆ね起きさま褥の上に突立ちて頻りに妾を呼び覺まし給ふに、何事ぞと打驚きながら半ば身を起せば、矢庭にわが左手を引捉へ給ひて、さらば／＼、最早發車に間もあるまじければ箱根へ向はむに、いざ急げよ、といつになき頓狂聲高くふり絞り給ふに、次の間の姑母上も眼を覺まし給うて駈入りたまひ、妾とふたり様々に手を盡していよ、狂ひ亂る良人を宥めつ賺しつ。夜の明るるを待ち詫びて使を走らせ、世に名ある國手達を招きて診察を請ひしに、皆言合せたらむやうに、腦の機質を害ねし精神病なれば本復のほども、到底覺束なき由、氣の毒けに言殘して辭去せられつ。妾は姑母上と共に落膽して、互に吐息を洩らすのみなりしが、やがて心を取り直して人のよし

といふめる有らむかぎりの手當して、去歳一とせ神に、佛に、その疾の癒えなむことを祈りつづけしも、悲しや終に其効驗なくて良人の精神はいよく錯亂しゆくのみ。

日夜憂愁の絶えせぬうちに年も改まりていつしか實家の産神なる天神祭禮となりしに、實家よりは是非要事のあれば旁一泊の都合にて歸り來よと、再三の音信をうけ、心は進まねど、此一月亡姉が一周忌の法會に歸りて泊りし後ち、先々月に一度、本多様よりの歸途に一寸立寄りたるまゝ無沙汰せる事とて、姑も切に勸め給ふに否み難く、一雄を連れて、久し振に實家に歸りて裏の六疊にて亡姉の肖像畫をおがみし夜、妾に再縁せよとの意ひも寄らぬ詞を父上が口より聞きて、一方ならず打驚かされぬ。

兩夫に見えぬを女の守るべき道とぞ聞けるに、況して妾には、よしや病中なればとて歴としたる良人のありて、そのなかに此一雄といふ可愛き子まであるものを、殊に亡姉の婿君として義兄上と呼びまつりし策造様に、小夜衣重ねむこと返すくも忍び難ければ、餘事は知らず、此事許りはいかに父上の仰せなればとて、承け引き侍らじと、袖噛み締めて泣伏せば、そは聞

かでものことなれど、又吾身となりて考へても見よ。祖先以來相續して世に由緒ある吾が小川家の血統を、吾の代に至つて絶やさむはいかにも口惜しきことならずや、汝の胸の苦しさは不憫ならぬにあらねど、何事も皆御先祖への義務と思つて是非に納得して呉れるやう。と涙ながら因果を啣め給ふに、親ありての子と思へば、それをもおして否とは言張り難く、さりとして肯ひ得べきことならぬに義理と情に搦まれて、せきあへぬ涙に正體とてもなかりしが、兎も角も今一應、篤と後先の分別をした上で。と父上の詞にやうく其夜は免れしかど、あはれ今日此頃の面寝れひとしほ加はりしもそが爲ぞかし。

今朝姑母が實家へ赴かれしも、定めて彼件のためならむが、さるにても父とは兄妹の間柄なれば若しや實家の大事とて父の言葉に従ひたまふにあらじか、否かと思案に暮るゝ程に、いつしか針の運びも止りて、吻と深き溜息を洩らせる折しも、不意に表の格子戸に仕掛けたる呼鈴の響くに、すやくと寝入れる一雄の目覺めすやと氣遣ひつゝ、密と身を起せし途端、次の間より起りくる良人が漢詩を吟する聲！

迷ひ路

一

浅藏は姫路の娘から来た今朝の手紙を、また今更のやうに長火鉢の抽出から取り出して、薄暗い洋燈の火を掻き立てた後ち、封筒から掴み出した紙の皺を丁寧に伸しつゝ、別段讀む氣もなく覺束なき假名字を拾ひ行く程に、いつしか花より父上へ、とまで口の中に讀み終つて、偕て茫乎と手紙を膝の上より迂り落して、遽かに氣が注いたやうに兩手を駢と胸の邊に組み合せたかと思ふと、兩の眼を閉ぢて思案に沈み込むだが、時々胸の底から深い溜息を洩らしては、また密と目を細う明ける。

蛙の鳴く音喧しき脊戸口が明いて、二分心の火影が二三度揺れたかと思へば、夜目にも氣注くほど近頃滅切と寝れた妻のお金が、梳き髪の髪を撫でつけ乍ら、片手に濡手拭を提けて這入

つて来たが、まだ氣が注かぬらしい良人の有様を見るより、意はず一寸眉を擧めて、靜かに上り口で草履を脱いだ時、始めて浅藏は目をあけたので、

「貴郎甚う遅うムんしたね。どうでした、本家はどなたもお變りムいませんなんだかへ。そして、あの話の様子は……」

とお金は言掛けたものゝ、良人がいかにも浮かぬ面色に大方は推せられたので、今強ひてその機嫌を損ねるでもない、

「モウお歸りだらうと思つてお茶も沸かして待つてましたのですが、裏の柳屋さんから言うて来て下されたので、一風呂貰ひに行つて不在に仕て居ました。さあ貴郎お茶漬をお喫りなさいまし。」

と戸棚から半ば禿けて生地の奎目が見える塗膳を取出して、良人の前へ据ゑた。

「サア、お茶が冷めるからお喫りなされ」と、復た促されてやう／＼箸を取上げたが、浅藏の心は目の前の膳を放れて遠く坤の方角へ五里飛んで、姫路は梅ヶ坪小春樓の、奥まつた段

階子の下、薄暗い四疊半の片隅に、物凄くほど顔色の青ざめ果てた娘の病臥してゐる枕元で、介抱しつづけてゐた這般中のわれに返つてゐるので、食事も砂を嚙むやうに何の味もなう、やつと一杯の茶漬を掻き込むで仕舞つて、投出すやうに箸を下へ置いたかと思ふと、もくねんと其の手が直ぐ元のやうにまた胸の上に組まれて、頭はおのづと低がる。

此鬱ぎ込むでゐる原因は娘からの手紙。それが今朝来た時、鼻詰らせて良人が讀み聞かせて呉れたので、お金も俱に涙に暮れて種々と相談をした上、久しく疎遠に過してゐた下里村の本家へ淺藏が行く事になつたのであるが、元來淺藏は本家の兄と圖らぬ事から不和になつて、二十年の久しい間往來も仕ない程であるのに、その意地を捨て、手を突いて頼みに行くと言ふのは、いかにも厭でくならぬので、どうしても氣が進まぬのを子と言うては外にない一人娘のお花が、いま生死の境目。何をおいても見殺しには出来ぬといふ親心と、假令これまでは絶縁同様になつてゐても、ただひとりの弟のこと。何も彼も打明けて、こゝに八十圓といふお金子があつたなら、兄様のためには實の姪なり、私達には何よりも最愛の娘を鬼の棲家から取戻

して養生させ、絶えかけてゐる玉の緒も繋ぎとめられ様との事を、赤心の底から折入つてお頼みなされたならば、そこは親は泣寄で、またどうなりと相談に乗つても下さらうから。と妻にも段々説きつけられたので、やうく我を殺して兄を訪うたのは、丁度今日の晝過であつた。わが臍の緒切つた本家の鬨を高く跨いで、「御免下さい」と他人行儀に改つた淺藏の聲に連れ、「はい誰様で」と取次に出て来たのは紺の引張を着た赤ら顔の下女で、火が着きそうな頭にも女の嗜みか洋銀の簪を挿してゐる。

「旦那はお在宅かへ。」

と稍々鷹揚に尋ねたが、

「ちよつと只今はお不在でゐますが、貴客は誰様で、」

問ひ返されたので、少し躊躇ひ乍ら、

「そんならお敬さんに、淺藏が尋ねて来たと言つてお呉れ。」

と取次がしたけれども淺藏の胸は穩かならぬのである。

二

其の因縁を語らうものなら随分長いけれど、嫂のお敬と言ふのは、まだ娘盛りの頃に、両親に離れて他に寄邊なきまゝ、伯母の縁に縋つて此庭井家に世話になつて居た頃、若い同志の習としていつか淺藏と互に相思の交情となつた。けれど此の界限では相當の財産家の事だから、他目が多い丈けにまだ此赤繩の糸は結ぶ機會が無かつたのであつた。

女の口よりは兎も角も、淺藏は幾度か此事を母へ打明けて、互の希望を叶へ度う思うたけれど、兄の太平が現在戸主の身でありながらまだ獨身であるのに、弟が先へとも言ひ兼ねるので、梅好が青梅を目前へ突き出されたやうに、口に唾を溜める思ひで待ち兼ねてゐた。

いくら内氣な偏屈性でも、三十になるまで未だ娶らぬとは兄貴も餘り悠長すぎると、氣を揉むだは強ち淺藏ばかりではなく、母親も良人に死別れてからは、一日も早う初孫の顔が見度い一念から、相應しい縁を求めては太平に勧めたけれど、ただ「まだ早い」の一點張で頓と取合

はなかつたうちに、お敬を引取つて世話する事になつてから、前の世で笑うて損をしたかのやうに、これまでいつも苦り切つてゐた太平の容子が、偕ても初心な事よ段々變つて來た。

隠すとすれどほの見ゆる素振に、頓て母もそれと曉つたけれど、これは餘り嬉しうも思はず、却て苦勞の種となつた。兄よりは弟が可愛いわけではないが、お敬を慕つてゐることを先に氣が注いでゐただけ不愜は淺藏に掛つて、どうかならう事なら年も似合うて居る事故と思つたけれど、偕て今迄は頓と縁談に耳傾けなかつた太平が、別に人並優れたと言ふ程の容色でもないのに、お敬を思ふと言ふのも全く縁があるのであらうし、また家の爲めを思つても戸主は先づ大事にせねばならぬから、寧ろ淺藏には不憚乍ら他から娶ふ事にしてと、色々考へた末、母親は思ひ定めて或夜密かに太平に此事を言出したが、案の定、太平は大恐悦であつた。

母親も兼て覺悟の上ではあつたが、偕て愈々になつてから兄の得意に引換へて、弟とお敬の豫想に餘れる失望落膽に、一方ならず哀を催はしたが、今更らどうする事も出來ぬので、お敬には段々因果を含めて涙もろとも納得させ、また淺藏にも色々世上の義理を説き、宥め賺て

これも同じく涙で一應得心させはしたが、此間の母親が氣苦勞と言ふものは、中々並大抵でなく、先づは芽出度う表面丈でも四海波が静まつてから、十月経たぬまに持病が嵩じて、黄泉の良人が跡追ふ身になつたのも、其氣苦勞が大分手傳つたのであるらう思はれる。

兄とは全く反對なほど快濶とした性分であつた淺藏も、掌裡の珠を奪はれて、此世に望を失うてからは、恰で別人の如く陰氣になつてゐた處へ、其翌年母を失うたので一入心を破られて自暴氣味となり、果ては飲み慣れぬ酒の味が腸に沁入るほど旨くなつた頃には、陰になり、日向になつて慰め諫めて呉れるお敬の前でさへ「これも誰れ故」の鼻唄交りにころり肱枕。生噯に續く高聲と言ふ有様になつた。

内心氣の毒で堪らぬので、お敬が淺藏への心盡しも普通でない程に、たださへ唐變木の太平の眼にこれがどうしてあやしく映らすにおけやう。次第に太平の氣が僻んで來るにつけ疑心暗鬼を生じては散々兩人へ辛う申るので、これで母といふ油の力で靜つて居た浪もそが亡き後は吹き立つる嵐に漸く高まつて、家庭の平和は終に破れた。

小止みなき風波に堪へ兼ねて淺藏は、廿餘年住み慣れた下里村の吾家を後に、いさゝかの知己を便つて姫路へ出たものゝ、偕て思はしい事もないので、程なう富田村まで戻つて來て今の宅へ入つたのであるが、他人の田地を小作する水呑百姓位で、一生を終らねばならぬかと思へば殘念でならず。何とか今一奮發せねばと思つてゐる間に、縁あつて娶うた妻のお金に間もなうお花と言ふ可愛らしいのが出來て、それがまた何よりも可愛い丈け、追々功名心の切尖も鈍つて來て、到頭全くの小作百姓になつてしまつた。

よしや財産は無うても、一家樂しうさへ暮されたら何も不足はないので、淺藏も引込み思案ながら、熟ら首捻つて見ると、人並に稼いでさへ居たなら、先づ當座の衣食には困りもせず。妻のお金もお敬ほどには思はれぬけれど、どちらかと言へば實體な質であり、それに第一、歳毎に美しうなるお花がいとしようてならず。自分が追々齡を取ること、娘の脊丈伸びるのが樂しさに忘れてゐる中に、早やお花は十七の春を迎へた。

人からは鳶が鷹を生むだといはれても、却つて親心にはそれが嬉しうて、早う良い養子を貰

うてなどと、いつも夫婦が寝物語にして楽しんでゐたのに、花は待つ間が楽しみなもの、咲いては結句風に怨みが出る。

此村へ来た時にも、お金を娶うた時にも、一方ならず世話になつた幸作と言ふ人が、遽かに石灰山で失敗して逼塞した時に、義理で押した請判が災難になつて、憐むべしそのため終に切端詰つて去年の秋、お花を姫路の鬼の手へ渡した時には、浅藏は身の置きどころもないほど男泣きに泣いた。

けれども、まだその時にはどうしても本家の兄へ助力を仰ぎに行かうとは思はなんだ。否お金がそれを言出したのを一言の下に跳ねつけた位の権幕であつたが、いよく姫路へ見舞ひに行つて、世にも悲惨なありさまを目のあたり見せしめられた浅藏は、もうく腸を抉り出されるよりも辛く、たとひ吾身はどうならうとも、いつそ死んでも救けてやらねばと決心し、心細さに引留める娘に、どんな算段をしても、お前の身體を宅へ引取るやうにするからと納得させて、歸つては来たものゝ、偕て吾が物としては、吹けば飛びそうな茅家一つの他は何ひとつな

い貧乏世帯に、苟且にも八十と纏つた金子の工面が付きそうな筈もなく、兎角してゐるうち二日三日と容赦なく日は経つに、娘が嘸ぞ待詫びてゐるだらうと起ても居てもをられず。人知れず七頭八倒の苦悶をしてゐる處へ、娘から心細い事の限りを書きつらねた書信が達いたので、遂に廿年來延びに延びた我慢の角をヘシ折つて、首がちぎれても再び跨けじと心に誓うて出た本家の関を、據なう越えた浅藏の心の中は、哀れといふもおろかである。

三

「オヤ貴郎、ようこそお出で下さいました。サアどうぞお通りなさつて。」
奥より出て来たお敬は庭に立つてゐる浅藏の姿を一目見るより、懐しさに堪へぬらしく、そわくして奥の間へ案内したが、浅藏が堅く口を結むで沈み切つた顔を少し上げた時、其の裏れてゐるのを見て、意はずホロリとしたお敬も、早や四十路に近い年齢は争はれず、顔には小皺が寄つて可成り老けてゐた。

「マア貴郎、お久しうお目に掛りませなんだが、それでも良う御無事でお暮し下さいましたね。」

密と俯向いて涙を拭いたが、淺藏は猶默然と伏目勝ちで小顛ひのする下唇を噛み締めてゐる。

「オヤ私とした事が御挨拶も忘れて。併しマア眞實によろこそお出で下さいました。まことにこれまでは心にもない御無沙汰ばかり致しまして、實は一度富田村の方へもお伺ひ申してお目に掛りたうムいますのですが、頓と良人が出して呉れませぬ。北條へ参る事がムいまして、いつも一緒ですので、ほんに言はふやうない不都合で相濟まぬ事でムいました。併し妾は決して貴郎の事を一日も忘れる隙はなかつたので、どうかお察し下さい。」

その偽ならぬ眞心はお敬の顔へ現はれて居る。しかし淺藏はまだ無言である。否な感に逼つて舌が引釣るので、物が言へぬのである。

「聞かぬ事はムいませなんだ。貴郎もひどう御苦勞なさいましたね。ほんとお察し申します。これと申すのも全く妾が……あゝもう思ひますまい。なれど貴郎、此二十年と言ふ間、人

知れず袖絞つた事の多かつたのはどうかお推し下さい。それにしてもお可哀相なは、まだ存じませねどお花ちゃんやら……。」

とお敬の言ひ續けむとするのを、淺藏は遮るやうに此の時、思ひ切つて口を開いた。

「實は其娘の事で、今日は折入つて兄貴に頼みに参つたんですが、何時頃歸るでせうね。」

「ハイ、歸るのはもう程なう歸りませうけれど……。」

後は口籠つて、お敬は密かに眉の上へ皺を寄せた。

「それでは御迷惑でせうけれど、暫らく待たせて貰ひます。」

とは言うたものゝ、淺藏は煙草も喫まぬ極りわるさに、もう冷え切つた茶を、いま目に留つたらしく取上げざま一と口噉つて、物思はしけに打案じてゐるお敬の横顔を偷むが如く眺めた。

「貴郎の御用も畧御推量申して居ますが……。」とお敬は幾度か言ひ掛けては躊躇うた後、

「良人は只今も不相變偏屈が甚うムいますから、現に亡母様の十七回忌の時にも、妾が色々詞を盡くして、僅つた一人の御兄弟の事故もうお仲直り遊ばして、貴郎をお呼び申すやうに

と勧めたのですが、貴郎お羞かしい。何か妾が未練でもありますやうに……ともまた見えませうけれど……。散々に當て擦つて、到頭其儘になつたやうな仕儀でムいますから、どうかそのお積りで、どんな事を申しませうとも、決してお腹立下さいませんやうに。」

淺藏の眉はビクビクと動いた。けれども頓てまた思ひかへして一旦浮かした腰を落ちつけ、遣場に困つた視線を障子の硝子越に植込みへ投げたがそこには鎧垣に添うて一叢茂つてゐる山吹の花も、早や盛を過ぎたのか、風なきに滾るゝ花瓣は見事に青苔を彩つて庭の面に散り敷いてゐるのであつた。

一膝押進めて何か囁き度けに首差伸したお敬が、頓て口を開かうとした時、荒々しい蹙音が襖の外に聞えた。

四

「ではこれ程お頼み申しても、あのお聞き入れ下さいませんので。」

目の色變へて詰め寄つた淺藏の顔を、太平は冷かに尻目に掛けて、

「お前も冗い男ぢやな。此眼の玉の黒い中には、二度と此處の門を潜らぬと、悪口敲いて出た昔を忘れたかえ。イヤサ、廿年の永い間見向きもせず、他人でもせぬやうな不義理を仕て置きながら、いま困るからと言つて、それも平詫に下から出て來ることか、證文入れるから聞いて呆れる。そんな條理の立たぬ事には八十圓は借て置いて、半圓の金も貸す事は出來んわ。エ、手前までが何をしやがるんだ。」

傍で氣を揉んで聞いてゐたお敬は此の時堪り兼ねて、密と良人の袖を引いたので、忽ち妬心に燃ゆる異様な眼光で睨めつけられたのである。

淺藏の眉はまたもやビクビクと動いて、囁喘も顫ふばかりの激怒にうたれたが、血の浸染むほど唇を噛みしめてそれに堪へ、知らぬ間に握り固めて居た拳に、われとわが心を押へつて、

「成程そう承つて見れば實に一言の申譯もムりません。ツイ一時若氣の過失で、それがま

た謝罪の機会を失うて今日まで延引ました譯柄ですから、どうか何分にもこれ迄の事は水へ流して御勘辨下さいませやうに。浅藏一期のお願いでムいます。」

死んだ氣になつて、斯うは言うたものゝ、太平が素知らぬ風に澄してゐる顔を見ると、むらむらと疔癩は湧いて来て胸一杯。もう二の句は次けぬのである。

お敬はよう堪へて下されたと、感謝の思ひを目に傳へて、その言葉を承け、

「ねえ貴郎。浅藏さんもあのやうに詫びて居らつしやるのですから、もう堪へてお上げなさいね。お互に追々若うはならぬのですから、何と申しても外ならぬお兄弟のことですし、」

と言差して、窺かに良人の容子を窺うて見ると、口は堅く結むではゐるが、どうやら大分心が釋けたらしいので、

「それに段々お咄を聞けばお氣の毒ぢやありませんか。貴郎や妾にはまだ子の味が解りませぬけれど、たつた一人のお花ちゃんやらが、そんなお可哀相な事になつて居らつしやるのなら、別段大した金額でもムりませんから、貴郎用達てゝお上げなさいました。」

「エ、喧しいわい。手前等の知つた事かッ。」

不意に眠つてた獅子が起上つて吼えるやうに、太平は頭ごなしに嘯鳴りつけて、

「浅藏、モウ用といふのはそれ丈か。」

「ハイどうか御無態ですが、お救い願ひ度うムいますので。」

「フム八十圓をかへ。」

太平は分つた事を嘲るやうに問ひ返すので、浅藏はただ「ハイ」と答へたが、其詞尻には實に言ふに言はれぬ無念さが籠つてゐる。

「金子なら無益じや、貸す事は出来ぬ。」冷やかに言放つ兄の顔を、浅藏は意はず「エッ」と叫んで、穴の明くほど見詰めた。

「そうよ。まあ考へても見な。此のせち辛い時節に苟且にも八十といふ帯メた紙幣を、誰が返濟も覺束ないお前風情に貸す馬鹿があるものか。それとも何か確な抵當でもあるのなら、相當の利子を計りや貸してやるわ。」

「兄様、ソリヤお前本心で言ひなさるのか。」

「まだ狂人にも爲つて居らぬから、まあ本氣ぢやろかい。」
太平は故と落着いて見せる。

「それならどうでも救けて下さらぬのぢやな。僅つた一人の姪を見殺しにしても。」

「ハツハツハツ、お前も男らしうない、まだ解らんのかい。今の時節に金銭の上では兄弟もヘチマもあるもんかい。」

「イヤ宜しい。モウ頼むまい。」淺藏が堪忍袋の緒を切つて嚇となつた時、お敬の目は濕むで
るた。

「だが兄貴、お前一人が庭井の子ぢやないのだぞ。こんな事を言ひ出しや何だかさもしいや
うだが、別に一文の金も分けて貰はふといふのぢやなし、ただ暫時の間、八十圓丈け融通を付
けて呉れと、これ程事を分けて頼むのに、そんな薄情な事を言ふのなら、エイ、もう頼まぬわ。
こちらに不義理がありやこそこれほど氣量を下けて頼むのに付上りやがつて、何んぢや確な抵

當て？ フム馬鹿な、それが有る程なら泣き付きに來ぬわい。人非人奴。」

疊を蹴つて立ちあがつた淺藏。上り口まで追ひ縋つて來たお敬をふり放して、それからどう
三里の道を走いたか。石に躓いたり、溝へ落ち込んだりして、やうく夕暮過ぎに吾が家へ歸
り着いたのであつた。

五

妻のお金は膳を退いて棚元を片附けた後、濡手を拭ひ乍ら良人の前へ來て坐つたが、いつも
の良人が氣性を知つてゐるから、強ひて尋ねてはと躊躇うたけれど、偕て氣に掛つて堪らぬ
で、密かに容子を窺うてゐる中に、頓て良人は組むでゐた手を解いて、娘の手紙を封筒へ巻收
めたので、それを機にお金は尋ねた。

「貴郎、何とかあの娘へも返事を仕て遣らぬと待ち兼ねて居ませうね。」

「……………」

「エ、モシ、そしてあの本家での話は、どうでしたんですえ。」

「駄目よ。」

浅蔵は慳貪に云つてまた腕を組む。

「お留守だつたのですか、エ、モシ、貴郎まあ一遍どう言ふお話だつたのか、一と通り聞かせて下さいな。妾かとして氣に掛つてなりませんから。」

いかにも氣に掛るのは無理もない。話と思ふやうに運ばなむだからとてそれを女房に申るのは、わが無理であつたと氣が注くと共に浅蔵は言葉を柔らげて、偕て云々であつたと今日の一伍一什を語り聞かせた。

「それでは貴郎は何か他に目的があつて、そんな事仰しやつたのですか。」
改めて妻にかく問ひ掛けられたので、さすがに答に窮しつゝ、

「だつて兄貴があんまり酷い事を言ふから、餘程我慢はしてゐるが、ツイ腹に据ゑ兼ねて、思ふ存分云ひまくつてやつたのさ。」

「サア、貴郎、それが少しお考違ひじやありませんまいか。今そんな愛想盡かしを言うてお仕舞なすつては、他にこれと言ふ目的もないのに、どうして娘を戻す事が出来ます。妾は貴郎が日頃の御氣性を知つてゐます故、辛抱が大事ですからとあれほど申して置きましたのに。」
と言うたが浅蔵は、俯向いたまゝ黙つてゐた。

「ネエ貴郎、こゝが大切な御分別處ですよ。今朝あの娘の書信が来た時お云ひになつたやうに、あの娘の爲めには二つとない生命も惜しうないとお思ひになる程なら、暫時の間くらゐ、兄様がどんな事を云はれやうとも、聞き流して堪辨のならぬ事はムリです。兄様も、御自分の言前をこちらが逆はずに立てゝおいて、そして好い加減な所で案定お願ひ申せば、そこは人情で、よもやそれでも否とは云はれますまい、それは随分忌々しい事ではありませうがどうぞ死んだ氣になつて今一度お願ひ申して下さいな。他に何も工夫のない絶體絶命の場合ですからぬ。」

お金は涙ぐむで掻き口説いた。

姫路染

一

「東風は吹くく御空は曇る、霞交りの雨は降る」チョツ忌々しい、どうやら降り出しそうになつたわい。オ、ウ寒い、恰で身體が切れるやうだ。オヤ此畜生奴、また始めやがつたな。此向ひ風にまたしてもく道草を喰はれちや、お客人は偕て置いて此三太様が堪らぬえや。シイツシイツ、馬の耳に風ツて能く言つたものだ。素知らぬ振して居やがる。眞實に忌々しい、糞野郎め、聞かざあビシビシと此鞭でお見舞申すぞ。やれく痛いか「痛たあきや馳らんせ、馳つて付けて鼻撲つて、鼻が痛くば吉野へムれ」ドウドウシイツシイツドウドウ、そんなに駈出しちや滅法息が切れるわい馬鹿奴、待てッたら待たねいか。ハイハイドウドウ。と人通りと

て絶えて無き田舎道の心易さには、四邊憚らぬ頓興聲ふり上げて、他愛もなき事續け様に喋り立つる馬子が、撥鬢頭に豆紋の手拭仔細らしく鉢巻して、牽いたる馬の手綱に曳すられつゝ、首をすくめて走る態の可笑しさに、編笠被りし馬上の若侍は、思はず噴飯して、ウフ、、、貴様は中々歌巧者だの、どうじや今一曲歌うて聞かさぬか。所望だくと、餘りの徒然さに欠伸の種さへ盡き果てたる折柄とて興に入りて言へば、馬子は獅子鼻齧めかせて水鼻吸りつゝ、ヤレこれは飛んでもない事、アハ、、、併しお客人、歌ッてい物は下手でも面白いもんでがんすのう。己はこれでも在所では馬追の三太と言つて先あく雨乞の時、音頭でも取らうかッてな株でさあ。アハ、、、何と言はつしやる、是非試れツて、エ、イようがanus、一つ試りやせう、笑はッしやるな。こうーと……………それく、此頃此界限では、「雨か霞と飛び来る征矢のまこと鐵が徹らぬならば、主と逢ふ夜の蚊帳に縫うて、人目避けたい姫路染」ていなのが流行るんでがanusよ。と節面白う歌ひ終るや待ち兼ねて居たやうに噓一つして、オウ寒むやとまたもや首をすくめぬ。妙な歌が流行致すのう、してまたそれは如何なる理由か、其方存じて居ら

ば語り聞かせよ。と編笠越しに馬子の方に目を注ぎつゝ、馬上より問ふに、ヤレヤレ、此歌の理由でがんすかの。己も詳しい事は知らんが、何でも此頃城下に、矢であらうが槍であらうが、小鳥の名剣でも徹らぬていな豪儀な陣幕を染めるとか言ふ大評判の染物屋があるんだそうで、大方それを言ふたもんでがんせうよ。ヤアヤア最前から雨だとか霰だとか言つてたもんだから、到頭眞實物になつて仕舞やがつたぞ。此寒さに又雪と来ちやあどうなるものか。シイツシイツハイハイ。と遽に氣が注いたやうに慌て出して途を急げば、武士は暫らく頭を傾けて何事をか考へ込み居たりしが、頓て思ひ出したやう打領きて、これ〱馬方、今其方が申した染物屋と言ふは城下の何處で名は何と申す、存じて居るか。と尋ぬるに、三太は一寸顔ふり上げ、さればでがんす。此様に流行歌にまで謡はれるほどの大した染物屋が、不思議な事には何處にあるのか、城下の人でも知らぬくらゐで、薩張とわけの解らぬ話でござんすが、慥か今年の春とやらにも九州から二三人侍が上つて来て、其陣幕とやらを澤山に染めさせ持歸つたと専ら評判でござんした故、お上にも段々手を入れて御詮議なされたが、今一向不明らぬそうで、どう

やら嘘らしい、眞實らしい、雲を掴むやうな話でがんすての。と答へて暫く詞を切り、時に旦那は新在家村までと仰つたが、全體何處へお光来るんでござんすかへ。と問返せば、ウムナニ、身共の行先とな、身共は其新在家の孫右衛門と申す名主の許へ参るんだが、其方も同村であれば定めて存じ居らうの。と言ひも終らぬに、三太は思はず足を停めてふり返りざま、眼を圓うして、じつと武士の面を見つ。ヤレヤレそれは飛んでもないこと。その孫右衛門ならもう三年前も前に極樂往生を遂けて、たつた一人後に残つた妹のお花も、此秋の末ぶら〱病で死んで仕舞たを、お客人は未だ知らしやらぬのでがんすかへ。聞くより武士は馬上より轉び落ちむばかりに驚きしが、頓て何をか思ひ返しけむさりけなう粧ひて、フム左様か、では孫右衛門も妹も共に病死致したとな。儲て〱それは不愍な事だの、併し孫右衛門には慥か娘があつた筈であるが、其娘は如何致したか。とそつと右手の甲もて眼を拭ひつゝ問へば、オウそりやお雪坊の事でがんせう。彼娘はお客人、お花の子でござんすから、孫右衛門の姪でがんすかの。母親が死んで丁度初七日の晩から、氣でも狂つたのか家出をした限り戻つて来ぬものだから、村

中集つて段々手分して探しても見當らんの、もう其儘にしてごんすが、あれ丈の容貌を持ち乍ら惜しい事仕て除けましたわい。と言ひつゝも、流石田舎氣質とて、むくつけき面構の兩の眼に涙をふくみぬ。

訪ぬる人の在らずと聞きては、行手を急ぐ身の、今更二里近き道を遠廻りして行くも無益しければとて、武士は馬子に別れて徒歩となりつ。見渡す左手の雲際に、頭隠して聳えたる増位山の山腹を迂廻りて、樵夫の通る杣路を辿るが城下への近道と教へられけるまゝ、落ち行く夕陽を、何處迄もと西に追うてひたぶるに途を急けど、短き冬の日の、いつしか名残なう暮れ果て、何處の山寺に撞く鐘の音か、微かに響き渡りて物凄く聞ゆる頃、やうく山の中腹にさしかゝりぬ。

二

見上れば屏風の如く突立てる巉巖、見下せば底知れぬ溪谿、其間をうねりうねれる崎嶇たる

岨路は歩むに連れ狭うなり来て、神代ながらに生ひ繁れる樹々の梢の、いやが上に重なり合うて晝さへ闇き樹下蔭。行けどもく果てしなく、轉びつ匍匐ひつ、手探りに進み行く程に、やうく山を周りに籠りに出づれば、颯々と四邊の草木に音立て、吹來る北風は、鷲毛の如き雪片を飛ばせ、瞬く間に、野も山も一面の銀世界となし終りぬ。身に泌み渡る寒さと飢に、氣力も衰へて流石の武士も蹠躑き乍ら、雪明りに行手を透かし眺めつゝ、疲れし足を曳すり行けば生憎に雪はいよく降りまさりて、一足宛に深うなり來つれど、見渡す限り白皚々として、藁小家らしき物だになきに、心許りは焦燥れども、吾身乍らに思ふやうに脚は運ばず、何に躓きけむ礫と地上に轉び仆れたる儘、ふらくと其儘絶え入らむとせしが、ふと顔ふり上ぐれば、遙か前面の森のあたり、チラチラと燈火の木の間より洩れ來るに、宛然蘇生りたる心地して、勃然と起上るや滿身の勇を奮つて、一散に五六町駆け付れば、今來し山の谷間より、蜿蜒と野原を縫うて流るゝ小川の、稍々幅廣うなりたる片傍の森蔭に、此邊には珍らしく一町四方もあらむ高塀を遶らせて、表の入口に、槻造りの嚴めしき門を構へ、中央の母屋に續いて建て添へ

る二棟の建物と、少し離れし土蔵との間に挟みたる植込は、手入の丹精にいと雅趣のめでたきに、折柄白銀延べたる白雪は、樹々の梢に時ならぬ花を咲かせたれば、更らに幾層の光彩を増して、あはれ柴負うて通る賤の女だに暫時立停りて見惚れやせむする心憎き許りの栖家は、偕てもいかなる風雅びたる人士の隠れ家にや。漫ろ主人の心根も忍ばれて奥床しきに、火影は其前裁に臨める數寄屋の方より洩れ出るなりけり。

思慮も分別も次に廻して、先づ磔々と續け様に門戸を敲けば、程經て内より應と答ふる聲して人の出で来る聲音するに、掛金外す間も待遠しき心地して待詫ぶる武士の草鞋履きたる爪先より、雪の積りて白うなりたる編笠の上まで、見上つ見下しつ、暫時は瞬きもせで見入りたる三十路餘りの百姓とも浪人とも着かぬ青鬚男は、頓てそと打領きて、これは旅の御人、何御用ばしあつて、此夜中に來せられしやと、一寸不態に小腰を屈めて尋ぬるに、武士は會釋を返へして、拙者は姫路の城下を志して丹波路より罷り越せし者にて候ふが、今日しも増位の山越しに降る雪の爲め途踏迷うて、誠に難澁致し居れば、何卒今宵一夜の御宿を許され度、偏へ

にお願ひ申すなり。と詞を卑うして願へば、其由一應主人に申聞けむ程に、先づ暫時と、庭口に待たせ置きて、男は奥に取次ぎしが、頓て引返して出で來り、されば賓客、見らるゝ通りの茅屋なり。見苦しくともお構ひなくば、お詞に従へとの儀なれば、いざ此方へと、先に立ちて板石布き詰めたる廣庭より正面の玄關に誘ひぬ。

まめやかに手桶に湯を汲みて足濺ぎ呉れつ。珍らしき一枚板の式臺踏みて、玄關の正面に、見るから勇しき猛虎を墨繪に描きたる衝立の前を左に折れ、廊下傳ひに部屋三つ四つ通り越して、又左に曲りたる片隅の前に立止りて、重けなる板戸の扉を明けて請じ入れたる四疊半の茶室めきたる小部屋。運び入れたる有明行燈の光りに見廻せば、入口の他は皆堅固の塗壁にて窓一つなき怪しき造り態なるに、流石上手には半間の床を設けて、菴勝の寒梅活けたる花筒の後ろには、波濤高く天に逆捲ける大海原に、斜めに傾いて漂へる小舟を、何人の畫きけむ、いと勢よく描かれたる幅廣の掛物のみ、部屋中を睨め廻すやうにぞ懸けられたる。武士は部屋の中程に突立ちたるまゝ、暫時は茫乎と室中を見廻し居たりし間に、取次の男は、まことに穢く

るしうはムれど、先づくゆるりと御休憩下されよ。今に粗末ながら夕餉を差上ぐるべければ、と言残し置きて、部屋を立出で、入口の扉を礎と閉したる儘、表の方へ出で行きぬ。後に武士は只一人、薄暗き有明行燈に蒼白き横顔を照らしつ。つくねんと手を拱ぬきて、兩の眼を閉ち合したる儘、身動きもせず座り居たりしが、待てどもく人の入り来る氣配のせざるに、寒さは夜の深み行くと共にいよく厳しく齒の根もあはず、たださへ空腹の次第に飢ゑの増し来るに、半餉過ぐれど一餉経ても、さらに人の聲音のせざれば、流石の武士もほとく堪り兼ね起つては坐り、坐りてはまた起ち上り、座敷の中を行きつ戻りつ。據どころなく遠慮勝に手を拍けど、何の應へとてなきに、這度は思ひきつて續け様に激しく手をたゞけば、遽かにけたまましき物音するに、ハツと驚き乍ら身を退りて窺へば、天井板の上を鼠の駆け廻るなりけり。

我乍ら餘りの莫迦らしさに、思はず苦笑ひしつ。意を決して部屋より出で、人を呼ばむとて、扉に手を掛けしが、訝しくも扉は釘もて打付けられし如く堅く閉されて開かず。いくたびか力

をこめて押し試れど厚き樞戸の微動だにもせざるに、武士の面色見るく變り行きしが、頓て何思ひけむ、礎と疊の上に身を投げ伏せたるまゝ、身動きもせず耳を澄ませば、二間許り隔てしと思はるゝあなたの部屋より、微かに四邊の寂寞を破りて節面白う諠ふ女の聲。

歌（行き暮れて、翼休めし旅寝鳥、花や主人の薔薇の針、ソレく身をば刺さまくに、拾ふ神こそ捨小舟々々々）

繰返しては又繰返し、杜絶え勝に聞えぬ。勃然と起きあがりし武士は、四邊を靜かに見廻しつ。獨り打領き乍ら、帯引締めてツカツカと床の間に飛び上り、小舟を描きし掛物越に、後ろの壁に直たと身を寄すれば、アナ不思議や、彈機仕掛にてもあらむか。ガタリと音して掛物は、武士と共に後へ匆ね返りぬ。

三

「コレコレ旅の衆、氣を駭かに、ヤレ嬉しやお氣がつかましたかへ。危い事でムんしたわい

の。纖弱き身にも健々しく、雪の中に仆れたるまゝ氣絶せる若侍を扶け起し、様々に手を盡せし効あつて、武士はやう／＼息吹返し四邊キヨロキヨロ見廻すを、十九許りの少女が邊りの雪に照り返されて、更らに美しくしき瓜實顔の兩頬に、笑を湛へて言へば、武士は遽かに身を正して恭しく頭を下け、これはお女中様忝なや、既に危かりし拙者が生命を、お救ひ下されしは、まことや御身は命の親、有難う存入る。拙者生涯の間肝に銘じて聊か御恩に酬い度く候へば、何卒失禮乍ら御芳名お聴かせ下さらば、此上の喜びは候はじ。是非々々お聞かせ下されよと、只管に言ふを、少女は面羞氣に、少し頭を垂れて何のこれ許りの事、左仰せられては却て御挨拶に困ります。名告るにも妾は名もない山家育ちの賤の女にて、今は此館の小間使を勤むる卑しい婢女でムんする。餘りとや貴郎が御難儀のお痛はしさに、ツイ身の程も忘れ果て、恥かしや拙ない口吟み。それを能くもお聞分け下されし。これも皆日頃念する神佛様の御冥助や、卿の御幸運故でムんせう。さり乍ら此館に永居はおん不爲。いざ此の木戸口を左へ／＼と、傍目も振らず五十町許り行かせ給へば城下に着きます。さらば／＼お急ぎなされ。と急ぎ立

つる怒るなる少女の言葉に感じ入りたる武士は、思はず膝を拍て、ヤ、偕ては先に身の危きを他處乍ら諺うてお報らせ下されしも矢張御身にて候ひしか、偕ても／＼有難き御心底忝う存じ奉る。左承るからは猶更御名を聞かではやみ難し。實にも由緒ある人とお見受け申せしは僻目か、是非々々お明し下されよ。と辭むを強ひて願へば、少女も詮方なけに、さればでムんす。妾は雪と申す不束者、此片田舎に奉公する程なれば、由緒も素性もあらう筈はムりませぬ。ササ仰せの通り名を申し上げた上は、一刻も早う此場を落ちて下されよ。と又もや急ぎ立つる少女の顔を、雪明りに武士は睨と見詰めつゝ、思はず膝押進め、甚だ卒爾乍ら御身の故郷は、若しや新在家村にては候はずや。と問はれて、少女はハツと打驚きしが、頓てさあらぬ躰を糺ひつ。イエイエ左様ではムんせぬ。と隙と答へし聲根は少し顛へてぞ聞えたる。これは仕たり、我乍ら粗忽千萬にて候ひき。拙者は故あつて詳しく住處を申上る事叶はねど、笹谷傳之進と申す瘦浪人……、と猶も語り續けむとする武士の詞を能く聞きも終らで、少女は周章だしく身をすり寄せ、男の顔を打眺めつ。ヤ、ア左言やる卿は、傳之進様。エ、イ逢ひ度うムんした、

お懐しうムんす。存じませぬ事とて今迄の不禮は、どうぞお許しなされて下されよ。と我を忘れて聲高むるを武士は手をもて制し止め、靜に〜。それでは矢張りお雪どのにて候ひしか、お懐かしいは御同然の事。さるにても合點の行かぬは此館。お雪どの、此地は何處で此館は誰が栖家ぞ、また御身は何とて此館に住ませ給ふや、サ、聞かせて下され。と尋ねれば、お雪は遽に情氣返りて涙ぐみ、さればでムんす。これに就ては種々と悲しい事もムんすが、胸に痞へて一時には申されませぬ程に。先づ承りたいは貴郎が上、何とて斯くは此地へ來ませしや。新在家村の乳母が許にて苟且のおん別れ申せしより、指折數ふれば五歳の永の歲月、首尾能うお望は叶ひしか。サアそれ聞かせて下されよ。と問はれて、傳之進も聲うるませ、嗟乎月日の經つは早いもの。孫右衛門の宅にて御身と別れしより實にも早や五歳となりけるよな。某し其後ち都に上りて、米村福井の諸氏と共に諸國の志士と交を結び、様々に手蔓を求めて柳營の執權細川家に取り入り、終に首尾能く將軍家より亡君の怨敵田邊左近將監征討の允許を請ひ受けたれば、茲に數年の念願始めて屆き、天にも昇る心地して諸國に檄を飛ばし、同勢を驅り集め、

故殿の御舍弟永觀法師様に還俗を願ひ參らせ、御大將に仰ぎ奉りて、既に味方は忍やかに丹波路まで押寄せたり。然るに拙者一人大切の仰せを承り、先づ城下に忍入りて兼て内通の約ある城内の石井刑部等と打合せ置かむ爲め、今日しも此山の向ふまで參りしが、孫右衛門に少し含ませ置き度き用向ありて、新在家村へ向はむとせしも、馬子の詞に不愍や孫右衛門兄妹は病死して御身は行方知れざる由聞きたれば、本意なき思ひに涙を吞みつゝも馬子に別れて、徒歩にて間道を増位の山越えなせし處、勝手辨へぬ悲しさには、降る雪に途を踏み過まり、終に此館に宿を求めて此仕合せ。されど御身とかくも逢ひ得つるは、神明佛陀の御引合せならむ。有難し忝なし。シテ御身は抑も何故に此館に住まるゝぞ。また此館の主人は何者なるぞ。ササお聞かせあれ。といふにお雪は眼を瞬たき、ソレはまことに上首尾で妾までも嬉しうムんす。さぞや大殿様始め、貴郎の御兩親も妾が親共も、草場の蔭から喜んで居られませう。妾は貴郎にお別れ申せしより、乳母や孫右衛門と日毎東の空を眺めつゝ暮して居りましたが、丁度三年前の夏の初め、頼りに思ふ孫右衛門が、苟且の病のいつしか重りて冥府に旅立ちしよりは、

猶更頼少き身の心細く、明暮れ乳母と貴郎の御事のみ噂し合うて、お歸りの程を指折つてお待ち申せし甲斐もなう、その後絶えてそよ吹く風のおん音信だにふらぬほどに、如何になし給ひしやらむと、獨り心を痛めつゝ、ただ貴郎の身の御無事をひたすら神佛様にお祈り申すうち、あはれ杖とも柱とも頼みに頼みし、たつた一人の乳母までが、妾を後にふり捨て、此秋の末の方、忘れもせぬそぼ降る雨の日に到頭哀れの最期。身も世もあらず悲しきが中に、村人共の助けにてやうく形許りの野邊送りは濟せしが、重ねの身の浮苦勞に、寧ろ現世の儂なう思はれて、吾身も共に其儘乳母が後を逐はむと思ひ詰めしが、死ぬに死なれぬ因果には、聞くだに口惜しき乳母が遺言。ア、思出すさへ此胸も張り裂けむ許りの無念さに、女でこそあれ武士の家に生れし身の、やはか此儘犬死すべきやと思ひ返し、初速夜の回向の終はるを待ちて、村人にも告げず、家出して此箱にこそは住み込みて候ひしなれ、と言ひさして、お雪は吻と太息を吐けば、溜涙ハラハラと一時にはふり落ちて、地上の雪の面を傷けぬ。

四

頓てお雪は、再び語り續けむとするを、男は遮りて、シテ其お花が遺言と申すは、如何なる次第なりしや。と更らに蹂り寄りて尋ねれば、さればでんす。乳母が最後の際に、藥飲ませむとて枕元に坐りたる妾が顔を、瘦せ衰へて深く窪みたる兩の眼に直つと見詰めつゝ、苦し氣に息はづませ乍ら、涙のうちより絶途え勝に申し遺せし一分仔什を聞けば、過ぎつる歳の合戦に故殿を始め貴郎の父上を討死させ、剩へ主君の城館を奪ひ取りし極悪非道の田邊左近將監は、素よりのこと。更らに憎さも憎きは村山彈正奴、先祖代々御家老の重職を勤めて、身に餘る高祿を頂戴致して居り乍ら、お家浮沈の大事の場合に及むで、譜代相恩の主君に背き奉り、數千の朋輩の衆を捨て、只一人、敵に内通したるさへあるに、勿躰なくも殿に御腹を勧め参らせ、介錯仕るとして若君のお首級をも打ち奉り、それを小脇に抱へ込み敵陣へ赴かむとせしを、並居る諸士も餘りの事に呆れ果て、手を束ねたるまゝ止むるものもなかりしかど、剛直律

義の妾が父のみは、悲憤に堪へ兼ね後追かけ給ひ、力を盡して遮られしも、多勢に無勢の悲しさには、終に憎き人非人の爲め無念の御最期遂げられし由。實にもく、彈正奴こそは前代未聞の逆賊、お家の仇讐、わが青木一家の怨敵にて候へば、たとひその身を八裂にして炙り喰うとも嫌らぬに、其奴を、ツイ目鼻の先に置き乍ら、いかに女の小腕なればとて、一太刀の怨みも報いず此儘むざく死行く事かと思へば、無念なやら心外なやら、エ、イ寧そ腑甲斐ない此身が憾めしうムんす。どの顔下けて冥府にムる旦那様や奥様にお目に掛れませう、そればかりが氣になつて……と次第々々に弱る聲音に力を込め、果ては布團噛みしめ乍ら咽び泣くに、様様に勞はり慰めて彈正が今の棲家を聞けば、思ひも寄らぬ山隣の平野村に姫路染とやらを染むるとと専ら噂の高き館こそ、夫れなれと、聞きたる時のその驚き……。男は不意に口を挿みて、エ、ツ、すりや此館こそ日頃心を碎きて在家を尋ねし村山が棲家なりしか、エ、忝けなし。よくぞ知らせて下されし。ウヌ彈正奴、今といふ今、己れが白髮首を此傳之進が見事刎ねて呉れむす。と勢込んで立上らむとするを、早まり給ふな傳之進様。未だ申す可き事の候にと、

お雪は押しめて猶も語を次ぎ、斯く聞き知りし上からは片時も心の落着かねば、乳母の身まかりし後、その忌の明くをも待ちかねて此村へ参り、様々に傳手を求めてやうく此館に下婢となつて入込みしは、秋のころにて候ひしが、其後今日まで二月の間、あはれ吹く木枯に落つる木々の葉、軒端に結ぶ白露の玉ゆらだにも心にとめて様子を探れど、要心堅固なる構造とて、中々新参者の庭の植込にさへ、入ることならぬ嚴しい家法なれば、主人が寢所へ近寄ることは借て措き、其居間さへ辨ち兼ねる本意なさに、詮方盡きてただく溜息を洩らすのみなる折も折、此館に年久しく勤むる若黨の三平次と言へる者、羞かし乍ら妾を慕ふ素振のほの見ゆるより、はしたなき事とは知りつれど、大事の前の小事、逆ものことに瞞し込みて探らばやと色に事寄せ、様々に問試みしに、初めの程は堅く口を結びて嚙の端にだも言出でざりしが、或夜城下より客來の相伴に甚く醜酷して妾が部屋に來りし時、酒興に任かせて、何も彼も筒拔に喋り立てたる節々を繋ぎあはすれば、主人の彈正が部屋は丁度此向ふの、あれくあの燈火の洩れ出る數寄屋建にて、先程貴郎が危かりし、あの部屋こそは、姫路染と言ひふらせ諸國の顧客を

欺き寄せてあの室に泊らせ置き、夜半窃かにその生命を奪うて所持の金銀を奪ひとるてふ、世にも恐しき仕掛の部屋。一度ならず二度三度、罪なき人を欺き殺し生血を絞つて狐狼の慾を充たす、鬼よりも蛇よりも奸毒の振舞。あはれ能くも此歲月、神佛の罰の當らで無事なりしことよ。それにしても不訝しきは、彈正の悴の春千代丸。人鬼の子に似もやらぬ花羞しき優姿なるが、この春千代丸のみには親なればこそ、滅多に見せぬ笑顔を作り、目に入つても痛からぬほど愛するを、笑止や悴は嬉れしとも思はぬか。今歳十七の血氣盛りの身が、一室の中に引籠りし儘、いつとても鬱ぎ勝なるより、あの人鬼のさまんゝに手を盡す由。畜生にてもあの通り、子の可愛さは變らぬものと思へば、亡き父上が心の程も忍ばれていやが上にも増す無念さにエ、見付かつて死なば死ね、もう此上は寸時も辛抱ならずと、寝ても覺めても肌身放さぬ懐劍の、鞘拂うた事も二度三度候ひしが、思返しては、早やる心押し鎖めて好機の來るを今日か明日かと待ち居りしに、今宵しも貴郎と此館に周り遇ひしは、實にも日頃念ずる神佛様のお引合せか。もう此上はよしや鬼神を挫ぐ怨敵なりとも、いかで討取らで措くべきか。傳之進様、

随分おぬかりないやうに、加勢して給へや。と言終りて小袂きりゝとひきからけ、襦を懸けて身仕度し、懐中より短刀取出して目釘を濕し、サアこう御座れと、先に立つ。言ふにや及ぶ、彈正奴こそ、俱不戴天の君父の讐敵。やはか討洩らすべき。と太刀の柄丁に打つて、身を構へつ。さり乍ら年は老つても手強き彈正、必ず油斷ばし召さるな。不覺を取つては一大事ぞと、互に勵し合ひつゝ、奥庭深く忍び行けば、折節廿日あまりの片割月は、厚き雲の衣を脱ぎ捨てて、冴けき光りに皚々たる満庭の雪を照しぬ。

五

六疊の數寄屋建に、一間の床を取りて、淡墨の唐畫の前には、白梅の一輪挿風情面白く、半月形の書院窓の前に唐渡りの机を据ゑ、有明行燈の下、古人を友とする書見三昧に更け行く夜半も打忘れたる村山彈正。今歳還曆を祝ひし名残は、雪のやうなる頭の白髪と、銀髻に著けれど、人並勝れし大軀の腰曲りもせぬ氣丈さ。深き思慮を湛へたる額の皺に收めて、端然と危坐

せる儘書讀み續けて餘念もなき折柄、不意に燈の火影のゆらめくにハット心注ぎ、桐の火桶の上に翳せる左手を窃と伸して膝元に太刀引寄せ、後ふり向きさま屹度鋭き眼を光らせ、入口の方を透かし見て、誰ぞ、と聲掛れば、バタバタと聲音して次の間より駆込むだる男女の姿、手々に閃く氷の刃を振翳して彈正が右左にすつくと立てば、ヤア何者なるぞ、夜中寢所に亂入するは推參ならずや、名告れ〜。と屹と身を構へて詰れば、推參とは舌長し、やをれ彈正、如何に老耄れたればとてよも忘れはせまじ、舊姫路の城主木村式部少輔殿の家臣溝部左京が一子同苗傳之進とは我事なり。某し此度主君に代り父に代り、汝が白髪首申受けむ爲め罷り向うたるからは、さあ尋常に勝負せよ。と勢込んで呼はれば、お雪も甲斐々々しく詰め寄りて、懐劍逆手に振り冠り、飛鳥の如くも飛蒐らむ身構にて、聲清しく、ヤア珍らしや村山彈正、過ぎつる合戦の砌り、汝が爲めに無念の御最期を遂げ給ひたる父上、青木小兵衛の仇を報いむ爲め、姿を變して下婢となり、此箱に入り込みて隙を伺ひ居たる娘の雪、サア父の仇敵その首渡しやと、詞激しく名告り寄る男女の顔を、彈正ジロリと尻目に懸けて突立上り、俄に肩の揺

ぐほど冷笑ひて聲張上げ、黙れ兩人某しに向て仇敵呼はり近頃以て片腹痛し。成程此彈正は主君の介錯したる事もあれば、小兵衛の細首刎ねたる覺もあるが、まだ〜汝等に此首渡す程毫確はせぬ。見事汝等が細腕で、打てるものなら打つて見よ。飛んで火に入る大呆痴奴、アハツハ、と嘲けられ、ヤアおのれ憎き彈正奴。それお雪殿、と言ひ様眞向より拜み討に斬り下す傳之進の刃先を、太刀の柄もて發止と受止むる後手より、柄も徹れと脇腹目掛けてお雪が突ッ込む懐劍に、身を轉す間もあらばこそ、喚と立てたる叫聲と共に、傷口より颯と迸る唐紅。得たりと斬り込む傳之進の太刀風。空を打たせて彈正は苦しき聲ふり上げ、ヤレ待て兩人、言ふ事あり。と呼はるに、此場に臨むで待てとは卑怯ぞ、さあ尋常に首渡せ。と疊みかけたる刃先を、重傷に屈せぬ彈正は、掻潜り〜つ。猶も聲張上げて、聞きわけなや兩人。不肖乍らも村山彈正、いかで此場に及んで卑怯の舉動致そうや。言遣す可き事のあるに、待てと言はゞ、待たざるや。と由ありけなる言の葉に、兩人はやう〜刃をひきて、互に顔見合せ、眼を邊りに配りつゝ、彈正の傍に詰め寄りつ。シテ言遣すとは如何なる事ぞ。早う言うてお

仕舞やれ。と右左より尋ねられ、彈正は苦しき息吐きも敢へず、さればでゝる、聞いて下され。ア、思出せば十年前、語るも辛らき數度の合戦に、味方は無念の敗を取り、頼みに頼みし大日河原の決戦にも、甘々と敵の計畧に罹つて敗北せしよりは、昇る旭の敵勢に引換へ味方は日毎に沈み行く落日の憐れさ。無念骨髄に徹すれど、如何とも詮方竭きて籠城すれば、勝ちに乗つたる田邊勢、忽ちひたくと攻めよせて、早や外壕さへ乗取つたりと聞きし時の心外さ。おのれやれ叶はぬまでも、と手勢を引具し、死物狂に斬つて斬つて斬捲り、天晴城を枕に討死せばやと覺悟を決め、主君に拜謁してお暇を乞ひし處、お悼しや吾君には兩眼に涙を泛べ給ひて、許し給はず。密かに某を御座所へ召寄せられ、涙と共に呉々も仰せ付けられし一條、如何にお家のためとは言ひ乍ら、臣たる者の身として爲すに忍びぬ事なれど、重き主命の黙止難く泣泣仰せを承りて、心を鬼に主君の介錯仕りてお首級をあけ、若君のおん首級をさへ添へて敵陣に赴きしは、深き思慮のあつての事。其内情を知らぬものから、律義一遍の小兵衛殿、一圖に拙者の苦衷を思ひ誤られての止め立。果ては事の由打明る間も待たで斬り掛られし故、已

むなく防ぎし刃の切尖あまりて、おん命を斷ちしは何處までも此彈正。さあお雪殿、存分に父上の怨をお晴らし下されよ。末だく申し度き事も多けれど、寄る年波に、傷口の痛み得堪へ難ければ、早やお暇申す可き程に、今際に及んで此彈正がお兩人の心底見込むでお見せ申度きものあり。と言ひつゝ、顛ふ手に傍への手文庫取出し差出せば、兩人は互に顔見合せつ。傳之進は手文庫を抜きて中なる巻物手に取りも敢へず、周章だしく押延べて讀み下せしが、俄に仆れむ許り打驚き、ヤヤツこはこれお家再興の旗揚に與みせる一味徒黨の連判狀。シテまた木村菊千代丸と冒頭に書かれしは、現世にお在さぬ若君の御名にてはなきや。と訝れば、さればとよ、曩の日若君を討取りしと言ふは、敵を欺く苦肉の手段。まことは不愆ながら、かねて若君のお相手に小姓としてお奥へ差上げ居りし吾子の春千代が、年頃と言ひ容質と言ひ似たるが因果。涙の刃に首打落して身代りに立て、若君は其儘吾子の春千代として人目を欺き、今日が日まで無事にお育て申したるなり。又それなる連判狀の一味の諸士は、姫路染てふ合言葉もて、平素は諸所に分れ居れど、いざ旗擧げと言はゞ馬に鞍置き、打物取つて此館に馳せ集らむす千に餘

る味方の軍勢。と言ひも終らぬに、思掛なくも襖の外に聲あつて、ヤアヤア溝部傳之進。若君菊千代君を始め奉り、おん麾下の小澤主膳、石井刑部只今それへ罷出で對面せむ、と呼はりつ。静々出で來り威儀を正して座に着けば、兩人は二度吃驚。夢に夢見る心地してただ茫然たる許りなり。彈正は苦しき聲勵まし、各位方の御心盡しにて、手筈も既に滞りなく整うたれば、明日の勝利は疑なし。今宵館に泊りし武士を、姫路染の名を聞取りて、探りに來りし間諜とのみ思ひしかば、例の荒料理にて血祭にあけ軍の門出を祝はむと思ひしに、かねて都方より刑部殿へ報知のありし溝部氏ならむとは思ひも掛けざりし。拙者の命は惜しむに足らず、早々各位方には合圖の狼火を上げて軍勢を催し、都方に後れを取らぬやうお願ひ申す。それお雪殿、小兵衛殿の敵を打ち給へやと、西に向ひて合掌すれば、一座の人々思はず袖を絞りて、鼻吸る音のみ四邊の静けさを破りぬ。あゝ過てり、斯かる誠忠の彈正殿に双をむけしは、あはれ大鵬の志を知らぬ目無鳥の身の悲しや、と傳之進の歎けば、こは何とせう妾が淺果敢な女心より乳母が詞を一圖に信じ、そう言ふ深い譯ある事とは夢にも知らず、鬼とも蛇ともお恨み申せ

しばかりか、勿躰なやわが手に掛けて此重傷……と雪は涙にかき暮るれば、彈正は故と聲荒らけ、エ、此場に及んで心ばし臆れしか。お雪殿、何故此首打たれぬぞ。傳之進殿、何故力を添へられぬか。程なう東天の白まむに、早くくと勵され、泣々お雪は立上れど双持つ手を振上る勇氣もいまは出づればこそ、顔を背けて涙を拂ふ心の中の切なさ。けに己が身を斬らるゝよりも辛らかるべし。

折しも夥しき人馬の物音、遽かに門外の騒しきに、聞耳立て、彈正は勃然と面を擡け、明日の合戦に左近將監の生首見ぬは一期の無念なれど、魂魄この土にとどまつて味方の軍を援く可し。各位方、若君の上をお願ひ申す。それモウ軍勢の集りしに未だ打たぬか。エ、腑甲斐なや早や斬らぬか。と促されお雪は是非なく懐劍取直し、さらば彈正殿御免候へ、と思切つてふり上げし、双の光り閃くや冬の夜いつしか明離れて、折柄増位の山端に差し昇りし朝暾は、金色の光を放ちつゝ、四邊の積雪を照らして皎々と輝き波りぬ。

明治三十一年四月二十日發行、雑誌「少年文集」臨時増刊「青年文藻」上編「地賞」當選所載、ペンネーム天眠

難破船

上

家とは名のみ、柱曲がりて今にも倒れむとするを、僅かに二本の丸太に支へられ、壁は落ちて骨を露はし、隙間洩る風家根裏の煤を飛ばし、四疊半の床に敷ける筵は足踏む毎に嘔もたちなむ許り汚れ果て、北側の壁を切り込みて明り取りに簾めたる障子、いつ張り替へた儘にやおほかた紙も破れ、ただ綺麗なるは片隅にある竹の鉢巻したる竈の下のみ。

右手の隅に新聞紙張りの二枚折を立て、處々に綿の見えたるつぎぐの煎餅蒲團の中には人の臥し居る氣色なり。ときく苦しそくに咳く聲聞えて今しも目を覺せしやうなりしが、頓て齡のころ四十餘りの婦人。永の病に寒れ果てたる蒼白き顔をさも重たけに據けつゝ、肉落ちて

瘦せ細りたる手を蒲團の上に突きて四邊を見廻はし、蚊の如き細き聲にて文之助々々々と呼びたりしかど、何の應へもなく半町許り隔たりし磯邊に寄する浪の音微かに聞え、颯々と濱邊の松を揺る嵐、容赦なく吹き込むで枕元なる洋燈の火を奪はむとす。婦人は小首を傾けて何か頻りに物思ふやうなりしが、いつしか頭は次第に下がり、深く凹みたる眼、おのづから濕みて落つる雫、端なくも膝を濡らしぬ。

「文之助は何處へ行たのであらう、今頃他處に用事もなき筈。併しあの子もいま遊び盛り之年頃であるに此母を大切に思つて呉れよばこそ、夜も碌々帯解かぬほど深切に介抱して何から何まで氣を注いで呉れる。あの優しい文之助の事なればよもや用も無きに家を出ると言ふ事もあるまいけれど、これが今晩始めてのことなら何とも思はねど、先達中から今頃になると、いつでも家に居らぬが一體何處へ行くのであらう。今晩歸つたなら一度聞いて見やう。」
折しも背戸の方より人の足音して此方へ来る氣配なりしが、間もなく門口をそつと開きて入り來りし少年。年の頃は十五か六なるべし、窶つと足音を忍ばせて二枚折に近づきし時、内よ

り細き聲して「其處に居やるは文之助でないか。呼ばれて少年、驚きし體なりしが靜かに其儘坐りて兩手を支き「ハイ母様、私でムります。」文之助、すこし其方に聞きたい事がある、これへお出で。「ハイ。」と答へて恐る／＼母の前に膝り寄りぬ。「文之助、其方は此夜中に何處へ行きやつたか。「ハイアノナニお手水へ。」「イエイエさうではありますまい。嘘を吐いては否けませんよ。そして其方の其頭はどう仕やつた、濡れて居るではないか。さあ何處へ行きやつた、言うてお仕舞ひ。」母様、どうぞお免し下されませ、只今申上げましたは嘘でムります。實は母様あなたも御承知の通り、父上は去年の丁度今日お死亡遊ばしたに依り、後には親と申すはあなたお一人。どうぞ私も早く大人になつてあなたに御安心おさせ申さうと思つて居りましたに、僅つた一人の掛け替へのない母様、あなたが去年の秋からの御病氣、どうぞし御本復遊ばすやうと思ひましたが、申すも異なる事でムりますれど、今の身分では到底お醫者様は愚な事、賣藥さへ思ふに任せぬ手許、と申して此儘捨て置いて若しも……御病氣が永びいては成らぬと種々考へましたが、叶はぬ時の神頼みとか申しますれば、これは神様にお願ひ申すが

第一と村の八幡様に、あなたの病氣御本復の願掛けて毎晩お百度詣を致して居りましたが、丁度今晩で満願の百日目、首尾能く萬度詣を果たしましたので、お宮の井戸で水を浴びて……。「文之助、其方はそれ程までに此母を思つて呉遣るか、有難いぞや。父様が居られたならば無やお悦び遊ばさうに。言ふも涙の種ながら去年の二月の二十五日、丁度今日。朝早くからお隣家の又六殿と漁にお出で遊ばしたがお晝頃より俄の暴風。どうぞ御無事にと日頃信する金比羅様に祈りしかど、無い御壽命には御利益もなうて、船は翌日此濱邊に漂ひ着き、又六殿の死骸は四五日後ちに泉州の岸和田とやらへ打ち上げられたに、ただ其方の父様はどうしたものかお死骸も上がらず、無慘や何處の魚の腹を肥やしたやら。其後は且暮此世が味氣なう思はれてふと臥せつたが病氣の始り。今日は枕を上げむ明日は寢床を離れむと思つたれど病には勝てず。父様の一週忌の今日さへお墓詣もなし得て此通り寝て過すとは何たる因果ぞ。未だ年端も行かぬ其方に此様な苦勞をさしてほんに可哀相に。」と言ひさして、またもやいたく咳き入れり。文之助は母の後ろに廻りて背を拵り、「母様、其様にくよく／＼御心配遊ばさず、花咲く春をお待

ち下され。いつかは今日此頃の憂目を昔話に語り合ふ時もムりませう程に、何事も心を廣くお持ちなされて一日も早う御本復下されませ。オ、忘れて居りました。今日村長さんがお恵み下されましたアノお薬をどれ煎じませう。」

夕方迄は日和も好くて浪も穏やかに、一里餘り隔てたる淡路島も呼べば應へむ許りにて、海面に青疊敷き詰めたるが如く、二月の空には珍らしきほど凧きりたりしかば、永らくの間風波を避けて碇を下ろせし船も舳舻相衝むで湊を出で、各々志す方へ走せ去りしが、點燈頃より俄かに空模様打變りて、今にも暴風吹き起らむする有様なるにぞ、沖合にありし船頭はいづれも忙がはしく船を港に入れぬ。されば今迄は寂然と靜かなりし明石の港も俄に帆柱の林を爲しつ。斯くして夜に入れば北風次第に烈しく吹き募れるに、雨さへ篠突く許り降り頻り、山爲す怒濤埠頭に碎けて聲雷の如し。

明石の港より西半里の林村は如何なる事の起りけむ。今しも鑿々と太鼓を打ちて非常を報じ、三番の波止場には四五十人許りの人々打集ひて、沖の方を眺めながら頻りに打ち騒ぎつ。中に

村役場の提灯持てる村長は聲張り上げて叫びぬ。「誰れか今一人行く者はないか。七人揃うたが最一人無くては船が出せぬ。これしきの暴れを恐れるやうでは板一枚下は地獄の稼業は出来ぬぞ。誰れか今一人行かぬか。早く救助船を出してやらねば。あれ見よ、あの船は今に沈んで多くの乗組人は底の藻屑となつてしまわ。此村には人の爲に生命を惜まぬ義侠のある者は僅か七人しか無いのか。今一人、今一人、此大勢の中に今一人誰れか出ぬか。」陸よりも海に馴れたる漁師ながら此大暴れには辟易しけむ。皆逡巡りするのみなるに村長は地團太踏むでいよゝ氣を焦りぬ。

「ハイ私が行きますからどうぞ遣らして下さい。」と言ひつゝ、群集の間を掻き潜りて進み出でし少年。村長見るより手を拍つて「オ、出かした文之助、其方の志は感心だが、其方の母は今病中なれば其方が行つては……。」「イエエ村長様、其段はお構ひ下さいますな。先程太鼓の音を聞き付け何事ならむと出て見ればあの通りの難破船。其儘内に入りて母に其旨申し聞かせ何卒救助船に乘らして下されと願ひし處、母は暫時考へてゐましたが、今日は丁度去年死

亡りました父の一週忌ゆゑ、良い追善であるから行って救うて来よ。必ず生命を惜んで見苦しき振舞すな。此母の事は少しも心に掛けず、天晴手柄して来よと許されましたから、どうぞ私を行かせて下さいませ。」
 「ウム天晴々々、文之助行て来よ。其方の母は己れが引請けるから心に掛けな。さあ人が揃うた、皆の衆船を下ろせッ。」

下

唯見る、十町許り沖合に帆柱を折られ舵を毀されて、高く低く浪に弄ばれ、今にも沈まむとして頻りに救を求むる帆前船あり。をりから雨脚收りし空に、亂れ飛ぶ疾風雲の隙より物凄く照る月光のもと、濱邊に集ふ人影の数は増せども此暴風に恐れてや救助船出さむとする者もなく、憐れや多くの乗組人は今にも海底の藻屑と爲らむとして、猶も頻りに救助を乞ふの聲悲しげに微かに聞ゆ。

斯かる折しも一艘の小船、山爲す怒濤を物ともせず。八挺の櫓拍子揃へて勇ましく林村を乗

り出し、難破船目懸けて漕ぎ出しぬ、怒り狂ふ暴風激浪は船を木の葉の如く弄びて、あはや今にも覆へさむとす。

文之助の母は更け行く夜半に微睡みもせで、今猶止まぬ風波の音に耳欝て、頻りに物思ふ氣色なりしが、今しも吻と一息吐きて、「ア、文之助は未だ歸らぬか。先刻から餘程経つが今に戻つて来ぬは、若しや……ア、心に掛かる、最前救助船に乘らして呉れと言うた時、止めやうとは思つたなれど、又考へて見れば今日は丁度亡き夫の命日。人の生命を救ふならば佛の爲には第一の供養、若し救助舟が出ずに沖の難破船が沈むだ時には、中に乗つて居らるゝ多くの人人は非命の最期を遂げられて、其遺族には丁度妾の様な不仕合の人が澤山出来るであらう。それを思へば氣の毒で俵の身を思ふ事も忘れて多くの人々を助けたさに、僅つた一人よりない可愛子を遣つたが、今に歸らぬは愈々悲しい事になつたに相違ない。夫と言ひ子と言ひ、共に同じ日に亡くなると言ふのも何かの因縁であらう。船乗りの海にて死ぬるは武士が戰場にて討死すると同じと聞く。況して文之助は人を救はむ爲なれば死するもその甲斐があると云ふもの。」

き男を伴ひ入りぬ。見るより文之助は吃驚仰天。「エッあなたは父上様。」「オ、文之助か。」「お
 なつかしうムります。」「逢ひたかつた。」互に犇と抱き合へるが、病床の婦は夢に夢見る心地。
 此場の有様さらに合點ゆかねば呆然として詞もなし。
 暫くして父は涙を拭ひながら枕邊に坐つて語り出づるやう。「不審は尤……、村長様もおな
 みも文之助も皆聞いて下され。去年の二月十五日私は隣家の又六殿と朝早くから漁に出ました
 が、晝頃から俄かに空模様が變つたので之れは大變と驚いて、一生懸命船を漕ぎ戻し半里許り
 も歸りし時、案に違はず大暴風となつて見る／＼船は沈没し、私は一枚の船板に取り縋り陸を
 目懸けて泳ぎしが、折柄の北風に浪荒くて南へ／＼と吹き流され、唯だ此上は運を天に委さむ
 と、靜かに體を浮かして漂ひしが、半里許り過ぎし頃、不意に頭を打ちし迄は覺ゆれど其後ち
 は知らず。不圖目を開けて見れば不思議や我は救はれて船の中に介抱されてありき。聞けば其
 船は南洋丸とて大阪の某商店の帆前船にして、商品を積み南洋地方へ貿易の爲め其朝神戸を
 出帆し航海中なりし由。されば我一人の爲めに此暴風に逆うて、船を神戸に戻す事も出来ねば

年末には是非とも本國に歸らむ程に、それ迄は此儘乗り組みて辛抱せよと船長様の事をわけて
 のお詞。何の／＼私の生命は最前失うたもの。夫れをお救ひ下されましたは命の親、お間には
 合ひますまいなれど何なりと仰せ付け下されませ。力の續かむ限り働きますと、口には立派に
 言うたなれど心の中は村長様もお察し下されませ。可愛い妻子を振り捨て、行方も知れぬ大海
 原。思ひ出すごとに男泣きに泣きましたが、往いて歸らぬ死出の旅路とは異り、短き月日なら
 ねど今年中には、再び故郷の土を踏み妻子に會はれるのを樂みに味氣ない日を送つて居りまし
 たところ、船は恙なく積荷をおろし、その貿易も意外に利益ありて、豫定よりは少しく後れし
 なれど、漸く昨日瀬戸内海に入りて水島灘を通り過ぎ、播磨灘に差し掛かりしに、その頃より
 して俄かに天候一變し、暴風烈しく吹き起り山のやうなる巨濤の小止みだになく襲ひしかば、
 斯は叶はじと船員一同、必死と爲りて力を協せ、漸々此沖まで來りし時、あなやと思ふ間もな
 く暗礁に乗り上げし故、すはや一大事と頻りに合圖して非常を報じ陸に向つて救を乞ひしかど、
 此暴れに恐れてか、唯一艘の救助船も見えず。船底破れて差し入る潮に最早免れぬ運命と一同

ただ死を待つのみ。現在己れが故郷を目の先にして、一目妻子を見る事も叶はず、此儘海底の藻屑となるかと悲しさの極み。勿體ない事乍ら神佛さへお恨み致して居りましたが、艫の方より乗組みの一人が、救助船が來たツと叫むだ聲の聞えた時には、我れも人も狂人の様に、雀躍して悦びました。」

あはれ斯く位牌までも造りて弔ひるたる父の恙なく歸りし上に、文之助の心を籠めたる萬度詣の祈願に、神も感應まし／＼けむ、其後母の病將た拭ふが如く全快して、一家樂しき春をこそ迎へしか。後ち間もなく文之助は郡役所に喚び出されて、縣知事より賜はりし賞狀に、金子若干を添へて戴きぬ。

評 ナシヨナル、リーダーに載せたる「セーブト、フロム、ゼ、シー」と題する話を種に取りたるにはあらざるか。若し然らば巧なる翻案と云ふべくして、甚妙。又創作ならば更に妙なり。難ぜむには父が歸り來りし處以下、文之助とおなみの驚喜の有様など、今少し何とかありたし。兎に角、十五歳の少年には感すべき腕前と云ふ

へし。

明治二十九年四月十日發行「少年文集」第二卷第四號、「地賞」入選所載、ペンネーム柁吉

(明治二十六年三月脱稿處女作)

落花流水

右に妹山、左に脊山、中を隔つる吉野川の、雪を溶かしたやうな水流を、船で向岸の吉野山麓へ横切れば、早や櫻はチラホラ。これより吉野宮まで十八丁は、爪先上りの山坂道。山籠召す人の得知らぬ眺めまで、麓の茶店に草鞋求めし身の軽さに探り得て、谷より山、嶺より岨の難道に、疲れ切たる足を麓へ廻らせば、金峰山寺の銅の大鳥居を潜りたる頃、日は早や山の根に沈みぬ。

両側の旅宿の曳子等が、宿りを勧むる喧しき聲漸く歇みて、吉野山村を出づれば折ふし夕月朧ろに、行手は麓の六田の渡頭まで、花の下道一里半。

登る人、下る人、引きも切らぬ今花時の晝の賑ひも、流石夜に入りてはハタと静まりて、口の千本の掛茶屋に、雪洞點して喧騒ける一群を見し邊より、吉野宮の社前に額づきて、斑犬に

吠られしまで小一里の間に、眼を假すものとは、そよ吹く風に、ちらほらと鼻の先へ散掛る花瓣のみなりしに。

長き玉垣を左へ曲りたる時、忽ち眼に映りしは二三丁彼方に、これも山を下り行く人の、女らしき後姿。

急げるやうなれど女の弱足の抄り難きに、次第に追ひ近づきて、頓て袖と袂の相觸れむ許りに追ひ越しさま振り返れば、見られまじとや遽かに打背けたる横顔の、月光を浴びて偕ても麗はしきが中に、どうやら見覚えのある 倅 オ、それよ。

白の狩衣、緋の袴、仰けば裳にや觸れむ下け髪姿の、右手の櫛、左手の鈴、打振りく、宛然花に戯むる胡蝶のやう。あの神樂殿に入り亂れて立ち舞へる巫女八人の、北に四人、南に四人、同じ扮装のそが中に、一際優れて人の眼を惹きたる北の二番目の、年は十六か七か。世にも美しくしき巫女の、實にもそれなりき。

斯かる深山の中に、斯くも美しくしき人のあるものかと、深く思ひ泛べし今朝の今宵、殊に何

處やら彼の人に似通ひたる佛よと思ひし丈けに、頭こそ銀杏返に變つて居れ、争で見違ふべき。

さるにてもいかに山間に育ちたればとて、妙齡の身のただ一人、此寂しき夜の山道を下り行くは、まこと心得がたき事なるに、何となうそはくと見返り勝に後方へ心を配るさま、いよよ訝かしく、その昔この邊り花の下蔭の、落人さへそごろ偲ばれて。

絶えてゆかりもなき人の上ながら何とやらむ心に掛りて堪らず。爲らば吾が想像の眞偽を質しても見度き心地さへするに、意はず足を停めて後ふり返れば、間近うまで来て、得近づかて躊躇ふさま。われ歩めば後ろにも亦足音の續く。

同じ所作を幾度か繰返しつゝやうく麓に下りて、今朝預け置きたる靴と外套を茶店より受取りて、スタスタと渡頭の方へ急ぎ行く堤の樹蔭より、不意に呼び止むる優しき聲。見れば怪しや彼の巫女なりき。

女の身に相應しからぬ外套を、此川渡る間貸して給はれよとの願ひ、ツヤツヤ合點行かぬに

其故を問へば、ただうら羞かし氣に頭を俯垂れつ。故ありて窺かに大阪へ志すものなるが、

この渡守の爺に聊か面を憚れば、甚だ不躑ながらの御無心。

渡守の目を首尾よく免れて河を渡り、六田宿までの途すがら、先程より心に掛りたる事の數を、問ひつ賺しつ様々試みたれど、ただ少女心の羞しさが先に立ちてか、聲顛へ勝ちに、然かも深く心を決せし容子にて、段々の御深切は骨身に沁みて忝なけれど、言ふに言はれぬ浮世の義理、吾身の耻辱。どうぞお許なされて何もお尋ね下さらぬやうただ大阪に住み給へる生みの母上に會ふまでは、決してお案じ下さるやうな無分別は致しませぬ程に……跡は得言はで、流石小さき胸に湛へ兼てや、兩の眼には涙一杯。

葛驛の停車場まで三里の夜道、殊に其間には小車峠の難所さへあるに、纖弱き少女のただ一人、争で此深夜を冒して越さるべき。口を極めて此驛に夜の明くるを待てよと勸むるを、よく堅く心を定めし者か、固う辭みつ。幾度か厚意を謝して行手を急ぎし彼の少女が身の上の不安。余はひたぶる心に掛りて、宿の二階に身は横へたれど、眼は次第に冴ゆるのみにて、結

び兼たる夢路にやうく入らむとしたる一利那。階下遽かに騒がしく、互に罵り合ふ聲す。知らぬ間柄にてもなき汝に、何の隠し立などせう者ぞ。疑ひ深いにも程のある事、客商賣の人氣にも關ればとて、先程辭みし者を、巡察様にまで御苦勞を掛くるとは、餘りな仕打。サア太平ども山城屋の阿銀さんも、巡察様のお供して、思ふ存分家探して下され。疇走りたる宿の内儀の聲。續いて階段を上り來る登音。頓て吾が部屋障子はガラリと明けられぬ。隅の衣桁に掛けたる彼の外套を吾が前に突きつけて、わが伴ひしものと渡守の太平爺が執念く言ひ張るを、これはまた迷惑な。ほんの花見に來りし旅の者の、元よりさる娘など知るべき筈もなければと、余はただ知らぬ存ぜぬの一點張。頓て限なく室々を探索たる後ち、空しく彼の一群の立ち去るや、此家の内儀は吾が室へ來りて、繰返し今の不始末を打詫ぶるに、余はそれとなく彼の巫女の境遇を聞きしに、いま太平と共に來りし阿銀と言ふは太平の妹にて、吉野山村の旅宿山城屋の下婢より成上りの内儀なるが、彼の巫女のお作と呼ぶ娘の去歳の夏、父を亡ひてより、今は繼々しき乍らにもただ一

人の親と言ふ名を笠に、お銀はさる神官が紙幣束もて頬を撫で、の懇望を容れて、その妾にと説き勸むれど、お作の只管辭みて應ぜざるに、日夜苛責せむ許り強ひて歇まざりし爲め、今宵しも家人の目を忍びて家出せしより、あの仕儀と爲りしなるが、元來お作は、鄙に稀なる美貌の上に、營業柄に似合はぬ温順の氣質とて、既に此一月巫女勤めを強ひられたる時にも堪へ兼ね、實母の大阪に再嫁せるを頼りて、裏山越に五條停車場へ奔らむとせしを、追手の爲め引戻されし事もありしとやら。

さるにても實に哀れなる彼が運命よ。願くば這度こそ首尾よく虎狼の爪牙を免れ、温かき實母の愛に浴して多年の希望を達せよかしと、心竊かに余は祈りつ。一番列車に必ず乗らばやと、余は疾く起き出で、勢よく棍棒掴むで駈出す車上に揺られ揺られて、朝靄深き行手の山々を右に左に、頓て眞直に山麓へ迫り來て見上れば、絶巔遙に高き難道の、此は小車峠。先曳付けて喘ぎく峠の絶頂を超ゆれば、一目に見下す麓までガラダラの下り坂。これより